

第七章 大迫遺跡の調査

第1節 調査の環境

1. 調査の環境

調査地は、県道63号志布志福山線から町道28号縄瀬牛ヶ迫線を牛ヶ迫方面に向かい、左に分岐する農道黒葛1号線のほぼ中央部にあたる。さらに進むと県道63号線に接続する。

調査地周辺は、北から東側にかけて山林が広がり調査区の3区北側で最も高くなる。南から南西にかけては緩やかな平坦面に畑地が広がる。畑地は南西に緩やかに下る。畑地は耕地整備などにより削平を受けている。

遺跡は台地上に立地し、1km北には菱田川が流れる。調査地点は遺跡範囲の北端に位置する。

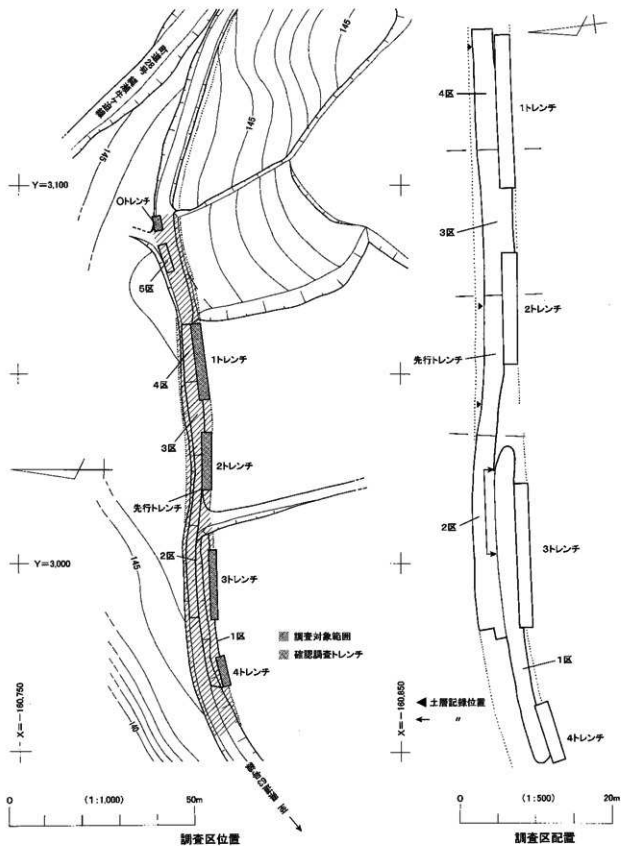
調査地の現況は未舗装の農道であり、農道整備のため大きく削平を受けている。

2. 調査の経過

調査口誌より以下に略述する。

平成13年10月10日(水)・11日(木) 2区の表土を重機で除去、危険箇所などに進入禁止のロープをはる。

- 12日(金) 1区を表上より人力で掘り下げる。
- 15日(月) 2区も人力での掘り下げを開始する。
- 16日(火) 降雨のため雨水対策を行ない、調査を中止する。
- 17日(水) 台風の接近により風雨の対策を行なう。その後、2区を掘り下げる。
- 18日(木) 2区を掘り下げる。2・3区の間に先行トレンチ1を設けて、掘り下げを開始する。3・4区のバラスなどを重機にて除去する。
- 19日(金) 2・3区、アカホヤ層下の黒色土層を掘り下げる。
- 22日(月) 3区、アカホヤ層下の黒色土層を掘り下げる。
- 23日(火)・24日(水) 2区を掘り下げる。
- 25日(木) 1区、アカホヤ2次堆積層を掘り下げる。2区、アカホヤ層下の黒色土層を掘り下げる。
- 26日(金) 2区、遺物出土状況および遺構完掘状況の撮影・実測を行なう。3区、掘り下げる。
- 29日(月) 3区、掘り下げる。2区、遺構の半裁・完掘、土層断面の撮影・実測を行なう。1区、掘り下げる。
- 30日(火) 2区、遺構の半裁・完掘を行なう。1区、Ⅱ・Ⅲ層を掘り下げて、遺構をⅣ層状面で検出する。撮影する。3区、西側半分を遺構検出する。平板実測を行なう。
- 11月1日(木) 1区を掘り下げる。
- 2日(金) 1区、アカホヤ2次堆積層を掘り下げる。遺構を検出する。3区、東半分を掘り下げる。
- 5日(月) 1区、アカホヤ層上面で遺構検出、遺物の出土状況とあわせて写真撮影を行なう。土坑4を掘り下げる。
- 6日(火) 1区、先行トレンチを設けて掘り下げる。上坑3・4を調査する。4区、掘り下げる。サツマ層上面で撮影・平板実測を行なう。
- 7日(水) 1区、アカホヤ層下の黒色土層を掘り下げる。土坑3を調査する。4区、遺構を半裁・完掘する。土層断面を撮影・実測する。
- 8日(木) 5区、掘り下げて、断面写真・実測を行なう。3・4区、完了、埋め戻しを始める。1区、掘り下げる。



第59図 大迫遺跡 調査区位置・配置

- 9日(金)・12日(月)～14日(水) 1区、掘り下げる。土坑3を調査する。
15日(木) 1区、埋め戻しを開始する。土坑3を調査完了する。
16日(金)・17日(月) 調査区・周辺・借地の現況復旧作業を終了する。

第2節 調査の概要

1. 調査の方法

調査は農業車両の通行を妨げないため調査範囲を二分して実施した。前半は先行トレンチ・2区、後半に3～5区を行ない、1区は両者に並行して調査した。調査区は着手順に番号で呼称して1～5区を設定した。なお、5区周辺については現道の左右に立木が並ぶことから、安全確保のため先にトレンチ(5区)を設けて遺構・遺物の状況を確認したうえで全面調査の必要性を検討した。その結果、検出された遺構は近年のものであり遺物も出土しなかったため土層の確認を行ない終了した。

掘り下げは表土(I)層・アカホヤ降下火山灰(IV)層を重機にて行ない、その他を人力で行なった。遺構の検出はⅡ・Ⅲ・Ⅳ層上面にて実施した。記録は写真・図面で行なった。

2. 層序

a. 削平状況と旧地形

調査地は1区を除いて現道により激しく削平を受ける。詳しくは土層図のとおりである。

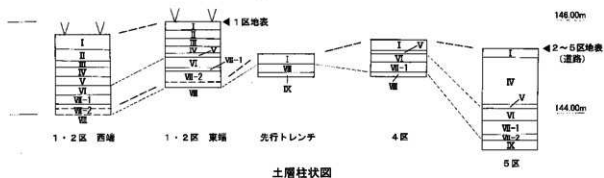
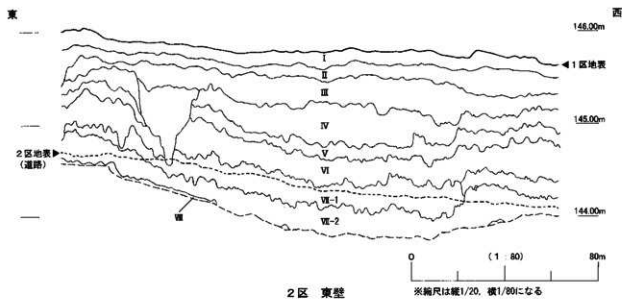
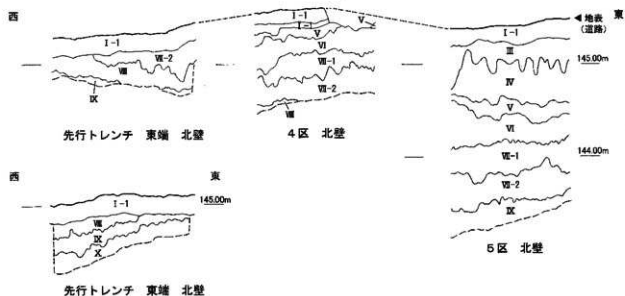
柱状図から推測される旧地形は、現在の道路の起伏と同様に調査区の先行トレンチから3区を頂点にした東西に下る丘状地形であったことが考えられる。縄文時代早期の遺物がまとも検出されたのはこの西側斜面にあたり、遺構を検出した3・4区は東側斜面になる。ただし、3・4区の南側は現在の地形でも南から南西に向かって傾斜しているので一概に東側斜面とは言えない。

b. 層序

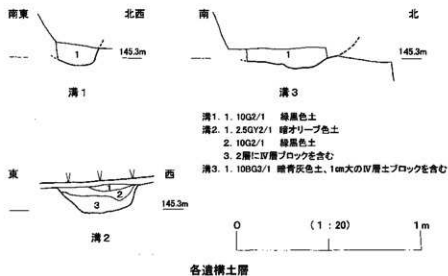
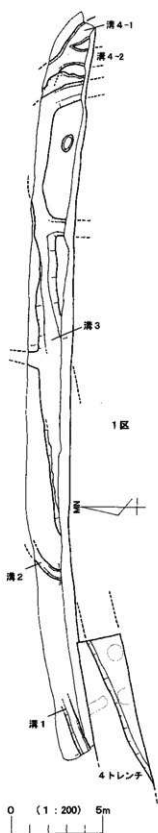
遺物包含層は縄文時代晩期、縄文時代早期の2層が確認された。層の特徴としては、アカホヤ降下火山灰(IV)層の堆積状況が5区と1・2区では大きく異なる。5区では非常に厚く約50cmを超えるが、1・2区では15cm程度と薄い。流出と堆積の現象によるものであろうが、縄文時代早期の生活環境・地形などを考慮するさいには注意が必要である。

以下、各層の特徴・見解を層別に略述する。土色・土質の詳細は基本層位を参照されたい。

- 第I-1層 アタゴ・バラスによる農道整備層である。
第I-2層 黒色土に多量の白色砂粒を含む。白色砂粒は大正期の桜島降下火山灰と思われる。削平後の整地層と考えられ現在の耕土にあたる。
第II層 黒色土に若干の遺物が見られたがI層からの混入、もしくはⅢ層の漸移層にあたると思われる。基本的には無遺物層と思われる。
第III層 調査では「アカホヤ二次堆積層」と呼称した、縄文時代晩期の遺物包含層である。
第IV層 黄褐色土。粒度により2層に分層が可能であり上層の方が粒度は細かい。無遺物層である。アカホヤ降下火山灰層と推定する。
第V層 黄褐色土。IV層より粒度が粗い無遺物層である。アカホヤ降下火山灰層と推定する。
第VI層 黒色土に降下火山灰と思われる白色・橙色砂粒を含む。縄文時代早期の包含層である。
第VII-1層 黒土に降下火山灰と思われる多量の白色・橙色砂粒を含む。縄文時代早期の包含層である。
第VII-2層 黒色土に多量の降下火山灰と思われる白色・橙色砂粒を含む。無遺物層になる。
第VIII層 黄褐色土ブロックが多く見られる。薩摩降下火山灰層と推定する。



第60図 大迫遺跡 各土層



- 第IX層 黒褐色のやや粘性強い粘質土。X層の漸移層であろうか。
第X層 褐色の非常に粘性強い粘質土。いわゆる「チョコ層」にあ
たると考える。

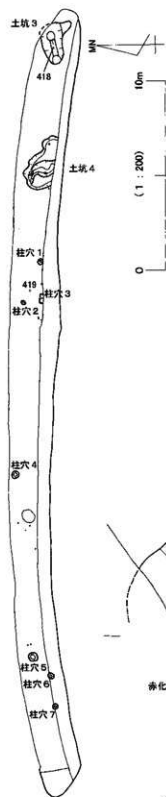
基本層位

- 第I層 5GY3/1暗オリーブ灰色土、～0.2cm大の白色砂粒を含む
第II層 10G2/1緑黒色土
第III層 2.5Y4/6オリーブ褐色土、やや多量に～0.3cm大の橙色砂粒
を含む
第IV層 10BG2/2明黄褐色土、やや多量に～0.3cm大の橙色砂粒を
含む
第V層 10YR5/8黄褐色土、非常に多量の～0.5cm大の橙色砂粒を
含む
第VI層 2.5Y4/3オリーブ褐色土、～0.2cm大の橙色砂粒を含む
第VII-1層 2.5Y4/2暗灰黄色土、多量の～0.3cm大の白色・橙色砂粒を
含む
第VII-2層 10YR3/1黒褐色土、多量の～0.1cm大の白色砂粒とやや多
量の～0.2cm大の橙色砂粒を含む
第VIII層 2.5Y4/2暗灰黄色土、1～20cm大の10YR5/6黄褐色土ブロッ
クと～2mm大の白・橙色砂粒を多量に含む
第IX層 7.5Y3/2黒褐色粘質土、多量に～0.1cm大の白色砂粒を含む、
やや粘性強い
第X層 7.5Y4/3褐色粘質土、非常に粘性強い

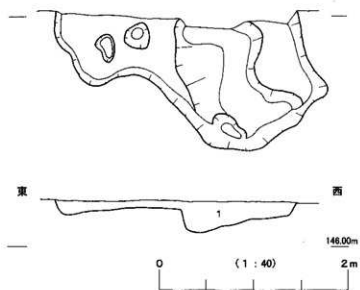
3. 調査の成果

残存状況から検出面1・2における遺構検出は、1区でのみで可能であった。

第61図 大迫遺跡
遺構1(Ⅲ層上面)

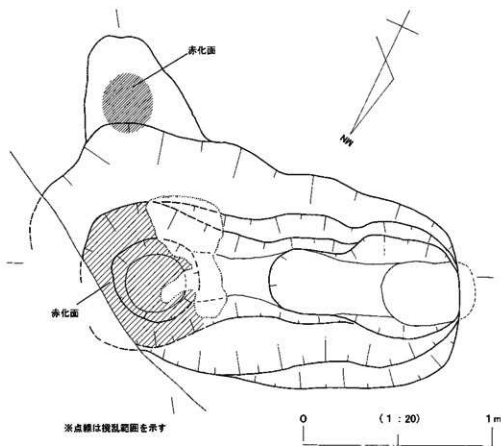


遺構配置・遺物出土状況



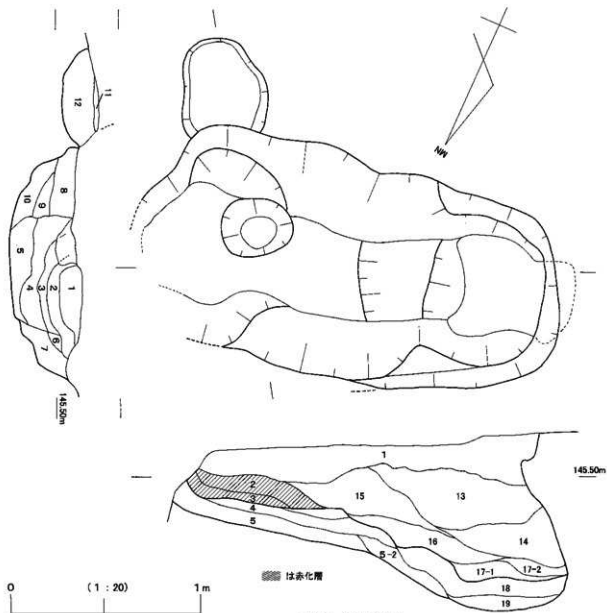
土坑4

1. 10YR4/4 褐色土、少量の炭化物(～5mm大)を含む



土坑3 使用面検出状況

第62図 大迫遺跡 遺構2 (IV層上面)



土坑3 (完照状況)

- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1. 5Y3/1 オリーブ色土、少量の炭化物(1~2cm大)を含む | 12. 5Y3/2 オリーブ黒色土、粘性を含む |
| 2. 7.5YR4/4 褐色土 | 13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 |
| 3. 5YR3/6 暗赤褐色土 | 14. 2.5Y6/6 明黄褐色土、やや柔い |
| 4. 2.5Y3/2 黒褐色土、粘性を帯びる | 15. 2.5Y3/2 黒褐色土粘質土 |
| 5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土、IV層土を多量に含む | 16. 15層に2.5Y6/3 にぶい黄褐色土ブロック(2~3cm大)を多量に含む |
| 5-2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土、粘性を含む | 17-1. 5Y4/1 灰色土、やや粘性を帯びる |
| 6. 7.5Y4/3 褐色土 | 17-2. 7.5Y5/1 褐灰色土、やや粘性を帯びる |
| 7. 2.5Y4/6 オリーブ褐色土、IV層土を多量に含む | 18. 7.5GY5/1 緑灰色粘質土 |
| 8. 5Y4/4 暗オリーブ色土、粘性を帯びる | 19. 10G4/4 暗緑灰色土、非常に硬い |
| 9. 2.5Y4/4 黄褐色土、粘性を帯びる | |
| 10. 10YR4/6 褐色土、粘性を帯びる | |
| 11. 7.5YR3/2 黒褐色土 | |

第63図 大迫遺跡 遺構3 (IV層上面)

a. 検出面1 (Ⅲ層上面)

遺構は数条の溝を確認した。覆上は黒色土であり、底面の勾配はどの溝も周辺地形と同様に西から南へと緩やかに低くなる。性格は不明であるが耕作のための排水路の可能性が考えられる。

規模・底面の状況などの特徴で溝1・2、溝3・4の二つに分けられるが大きな差ではない。時期は不明であるが使用時期は同じと考えられる。

遺物の出土は散見される程度であり溝内より陶磁器などが出土した。

(ア) 遺構

溝1 幅60cm×深さ12cmを測る。

溝2 幅45cm×深さ15cmを測る。

溝3 幅80～125cm×深さ12cm以上を測る。

溝4 2条に分岐する。

溝4-1 幅80cm×深さ6cm以上を測る。

溝4-2 幅80cm×深さ10cmを測る。

b. 検出面2 (Ⅳ層上面)

遺構は土坑2基、柱穴7基を検出した。覆上はⅢ層に類似した黄褐色土である。2基の土坑は共に規模が大きい。とくに土坑3は焼土面をもって人間1人が入れるほどの深さをもつ。柱穴もいくつか確認できたが、調査区幅が狭いことから配置などは不明である。

各遺構の時期は埋土がⅢ層に類似して、Ⅲ層から縄文時代晩期の遺物が出土することから縄文時代晩期の可能性が考えられる。

(ア) 遺構

土坑3 検出面での規模は長さ(230)cm×幅100～120cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。深さの異なる二つの底面をもち、その間を幅35cm前後の斜面で結ぶ。深さは浅い面で40cm、深い面で94cmを測る。浅い面には赤化面があり、周辺の覆土(2層)には炭化物も見られた。このことから焼土面と推測される。深い面には人間が1人座って作業できるほどの空間が設けられている。覆土を検討したところ使用時の埋土と埋没時の覆土に分けられ、使用面の検出を行なった。遺構の性格は詳細が不明であるが焼土面を有することから何らかの焼成土坑が想像できる。覆土の最上層から磨製石斧が出土した。

土坑4 平面は不定形を呈して、規模が258cm×(135)cm、掘り込みは2段に落ちて深さ8～32cmを測る。底面は細かな凹凸が見られた。

柱穴の平面形は柱穴3・5を除き、すべて円形である。法量などは以下のとおりである。

柱穴1 径28cm、深さ18cmを測る。

柱穴2 径38cm、深さ33cmを測る。

柱穴3 平面が長方形、長軸55cm×短軸30cm、深さ22cmを測る。

柱穴4 径40cm、深さ16cmを測る。

柱穴5 平面がやや不定形を呈して、長軸70cm×短軸60cm、深さ26cmを測る。

柱穴6 径30cm、深さ25cmを測る。

柱穴7 径22cm、深さ31cmを測る。

(イ) 遺物 (Ⅲ層出土)

遺物の出土位置は図中に記録している。確認調査分については土器がすべて3トレンチ、石器424が1トレンチ出土である。

土器 389～396

口縁部389～391、胴部392～394、底部395・396が出土した。型式は、縄文時代晩期の黒川式と考えられる。いずれも胎土が類似しており、2mm以下の長石・石英、1mm大の黑色砂粒を含む。

口縁部389は器面調整が粗く内傾する接合痕が明瞭に残る。器種は粗製深鉢と思われる。

口縁部390は外反する口縁に立ち上がる口唇部をもつ。内外面には精緻なミガキを施す。色調は内外面ともに黒色である。器種は精製浅鉢と考えられる。

口縁部391は内面に精緻なミガキを施して外面はナデで整える。口縁は波状を呈したと思われる。器種は精製浅鉢と思われる。

392・393は、外面に組織痕が見られる。394は、内外面に貝殻条痕が残る。

底部396は内外面に貝殻条痕が残る。器種は粗製深鉢と考えられる。

石器 418・419・423・424

打裂石斧418は、基部が欠損して刃部が残ると考えたが、刃縁から1.5cmほどのところに対になった挟り込みを思わせる凹みがあり周辺は磨耗する。このことから上下が逆の可能性も考えられる。

磨製石斧419は、刃部の半分のみが残るが、器面は丁寧に磨かれる。

423・424はここで磨石としたが、一般的なものと異なり楕円形の小礫を丁寧に磨いたものである。石材は花崗岩であろうか。

c. 検出面3 (Ⅳ層上面)

遺構は1・2区で2基、3・4区で9基の土坑を確認した。3・4区では他にも多数の土坑を検出したが、半截・完掘を行ない検討したところ、掘り込みが不明瞭なものが多かった。これについては樹根の痕跡などと判断して報告より割愛した。図中には位置と検出範囲を点線で表現している。

遺物の分布状況は1・2区では比較的まとまった範囲で出土した。とくに土器と石器の出土に偏りが見られ、土器片の集まる範囲の外側に剥片などが分布する。出土量は少ない。層位的に見るとおもにⅦ-1層より出土する。また、3区は削平が激しく一部で包含層が削平を受けるが、比較的包含層の残存状況の良好であった調査区南端で石炭などの遺物が出土した。出土量は極めて少量である。

(ア) 遺構

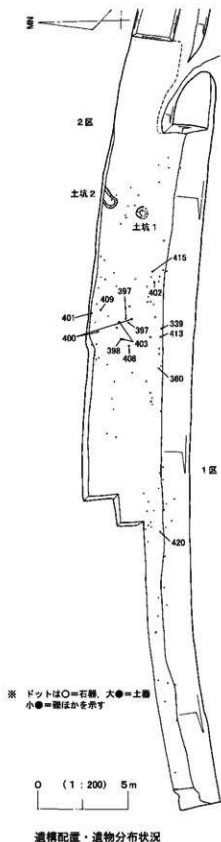
各遺構の覆土には大きな違いは見られなかったが、土坑1・2・5については黒色土の黒色が濃かった。

土坑1 平面は円形を呈して、径68cm、深さ38cmを測る。掘り込みは二段掘りで1段目は深さ14cm、2段目が24cmを測る。

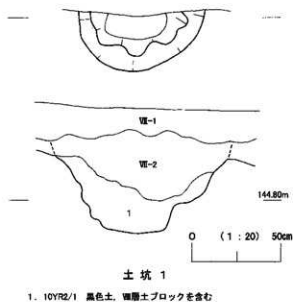
土坑2 長方形の平面を呈して、規模は(100)cm×48cm、深さ23cmを測る。底面・壁面ともに細かい凹凸が激しい。

土坑5 平面が不定形を呈して、規模が(112)cm×90cm、深さが三段掘りで10cm・26cm・36cmを測る。底面・壁面ともに凹凸が激しい。

土坑6 平面が瓢箪形を呈して、規模が(58)cm×26cm、深さ33cmを測る。底面が二つに分かれて



第64図 大迫遺跡
遺構4 (Ⅶ層上面)



1. 10YR2/1 黒色土、Ⅶ層土ブロックを含む

おりいずれも径15cm程度で楕円形を呈する。

土坑7～13は類似しており、一段の掘り込みに細かく凹凸の激しい壁面・底面をもつ。

土坑7 平面は不定形を呈して、規模が(115)cm×115cm、深さ11cmを測る。

土坑8 平面が瓢箪形を呈して、規模が(185cm×(90)cm、深さ21cmを測る。

土坑9 平面がやや楕円形を呈して、規模は径28cm×深さ6cmを測る。規模から柱穴とも考えられたが柱痕は確認しなかった。

土坑10 平面が楕円形を呈して、規模が(35)cm×23cm、深さ8cmを測る。

土坑11 平面がやや歪んだ円形を呈して、規模が(65)cm×58cmを測る。

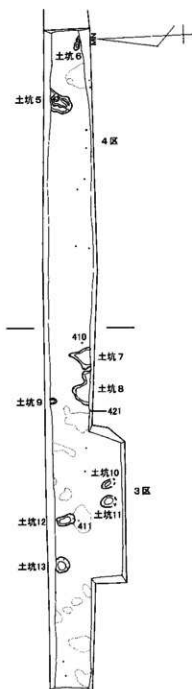
土坑12 平面は長方形を呈して、規模が(92cm×46cm、深さが38cmを測る。

土坑13 平面が円形を呈して、径78cm、深さ33cmを測る。

(イ) 遺物 (Ⅵ・Ⅶ層出土)

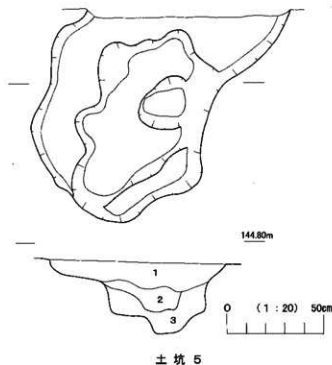
遺物の出土位置は図中に記録してある。確認調査分については、以下のとおりである。なお、椀ノ原式407についてはⅥ層から出土している。

2トレンチ：405・406、3トレンチ：407・409・414



※ 点線の範囲は調査したが人為的なもの可能性が低いと判断した掘り込みである

遺構配置・遺物分布状況



1. 10YR 17/1 黒色土
2. 10YR 2/1 黒褐色土
3. N2/0 黒色土と7.5YR3/3暗褐色粘質土の混合土

土器 397~408

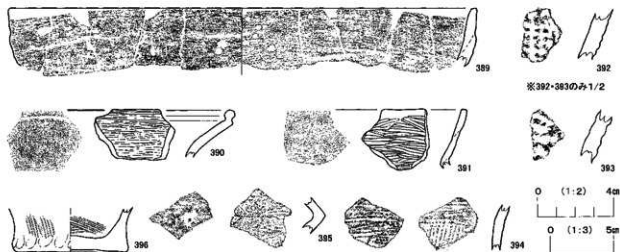
出土した土器は口縁部397・407、底部403・408・409、その他が胴部である。型式は397~403が石坂式、407は椀ノ原式と考えられる。404・405・408・409は前平式と思われる。

石坂式397~403は類似しており同一固体の可能性が考えられる。色調は10YR7/6明黄褐色、胎土には少量の長石、多量の石英・雲母・黒色砂粒を含む。焼成は軟であり器面が摩耗する。器形と調整・施文は、丸みを帯びた厚手の口唇部にはキザミメを施し、外反する口縁には外面に斜位の貝殻刺突文を巡らせる。円筒と思われる胴部には浅い貝殻条痕文を綾杉状に施す。内面はナデで整える。底部下端は貝殻条痕をナデ消し、底面には同一方向へのナデが見られる。内面は同心円状に粗いナデが施されている。

椀ノ原式407は口唇部に羽状のキザミ口を施して、口縁部外面に3条の沈線が横位に描かれる。胴部には幅1.3cmの網目状の熱糸文を縦位に施した後、致条の沈線を横位に描く。沈線文帯は3条と4条である。沈線の幅はすべて2.5~3mmを測る。器面は内外面とも横方向に丁寧なナデで調整される。色調は内面が10YR5/4にぶい黄褐色、外面が10YR3/2黒褐色、外面全面と内面下方には煤の付着が面で見られる。

405・406は類似しており内面を縦位のケズリ、外面を斜めの浅い

第65図 大迫遺跡
遺構 5 (Ⅷ層上面)



第66図 大迫遺跡 土器1 (3トレンチ出土)

貝殻条痕で整える。色調は5YR5/3にぶい赤褐色、外面には少量の煤の付着が見られる。焼成は縦線で器壁は5mmと薄手である。胎土には1mm以下の長石・石英・赤褐色砂粒が見られる。

404・408・409は類似する。色調が7.5YR7/6橙色、胎土には1mm以下の長石・石英・黒色砂粒、極少量の赤褐色砂粒が含まれる。焼成はやや軟である。胴部404は内面を縦位のケズリ、外面に深い貝殻条痕を横位に施す。底部408・409は外面の貝殻条痕が粗くナデ消される。

石器 410～417・420～422

石鏃410・411は石材がチャートであるが色調が異なる。410が白色で411は茶褐色である。

搔器416は石材が緑色のチャートで基部に対になる凹みが見られる。

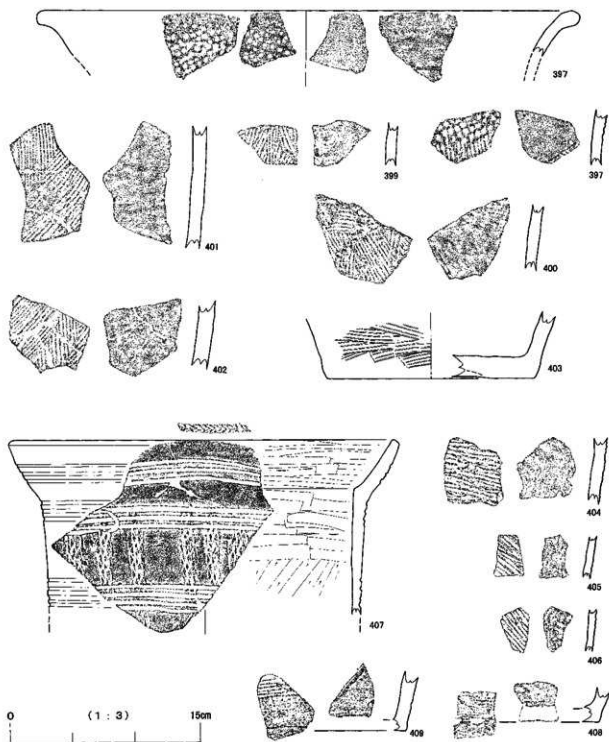
剥片412・415・422は搔器416と石材・色調が類似する。剥片414は不純物を含んだ黒曜石で透明度が高い。

磨石420は2面の磨耗面をもち、側面全体には敲打痕が明瞭に残る。敲打痕には浅いものの中に深いものが見られて数箇所集中する。

第3節 まとめ

調査成果のまとめとしては①調査地南側には縄文時代晩期の包含層が包蔵されていることが推察される。②土坑2は当町では類例がなく、縄文時代晩期の遺構として今後の調査例の増加が待たれる。③縄文時代早期の包含層も広がることが考えられる。④石坂式の包含層はⅤ-Ⅰ層であり、有明町における従来の縄文早期包含層(Ⅵ・Ⅶ)の中でも中位に位置する。

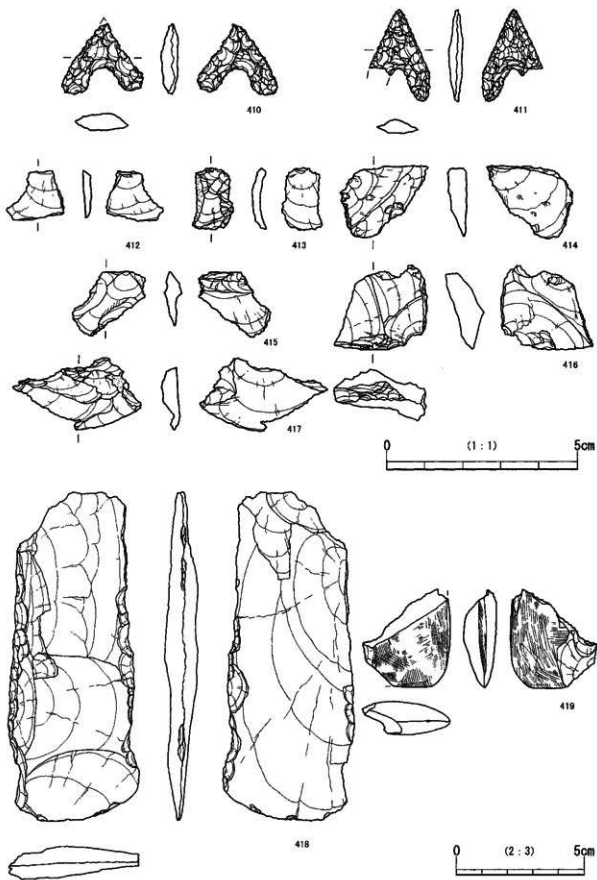
以上の点にまとめられる。



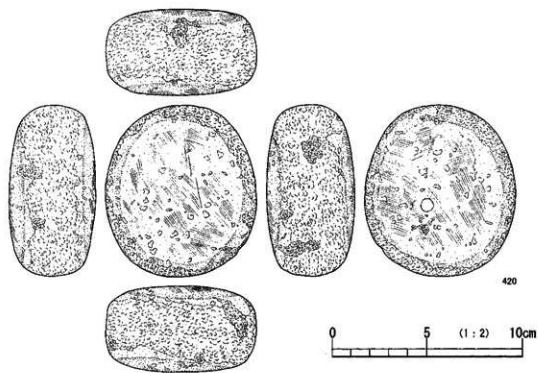
第67圖 大迫遺跡 土器 2

採回 番号	遺物番号	出土位置		種 類	器 種	石 材	法 量 (cm, g)			
		地点	層位				最大長	最大幅	最大厚	重量
418	265	1区東半	Ⅲ	礫石器	打製石斧	頁岩	12.90	4.90	1.30	78.50
419	282	1区	Ⅲ	礫石器	磨製石斧	頁岩	3.70	3.40	0.75	15.50
423	257	1区	溝4(Ⅲ)	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	3.29	2.57	2.04	16.33
424	(確認)	1T一括	—	礫石器	磨石(平)	花崗岩	3.40	2.58	1.04	11.15
410	256	3区	Ⅷ	剥片石器	石鏃	チャート	1.85	2.15	0.45	0.98
411	251	3区	Ⅷ	剥片石器	石鏃	チャート	2.45	1.60	0.40	0.89
412	238	2区	Ⅶ-2	剥片石器	剥片	チャート	1.20	1.50	0.20	0.40
413	366	1区	Ⅷ-1下	剥片石器	剥片	チャート	1.60	0.90	0.25	0.50
414	38(確認)	3T	ⅥorⅦ	剥片石器	剥片(U, F)	黒曜石	1.80	1.90	0.50	1.60
415	347	1区	Ⅶ-1	剥片石器	剥片	チャート	1.50	1.50	0.40	0.70
416	240	2区	Ⅷ-2	剥片石器	掻器	チャート	2.10	2.20	1.00	4.40
417	360	2区	Ⅷ-1下	剥片石器	剥片(R, F)	頁岩	1.80	3.10	0.40	2.30
420	296	1区	Ⅵ	礫石器	磨石	花崗岩	9.10	7.93	4.60	532.00
421	254	3区	Ⅷ	剥片石器	剥片	チャート	2.37	1.12	0.66	1.33
422	339	2区	Ⅷ-1	剥片石器	剥片	頁岩	1.40	1.16	0.24	0.44

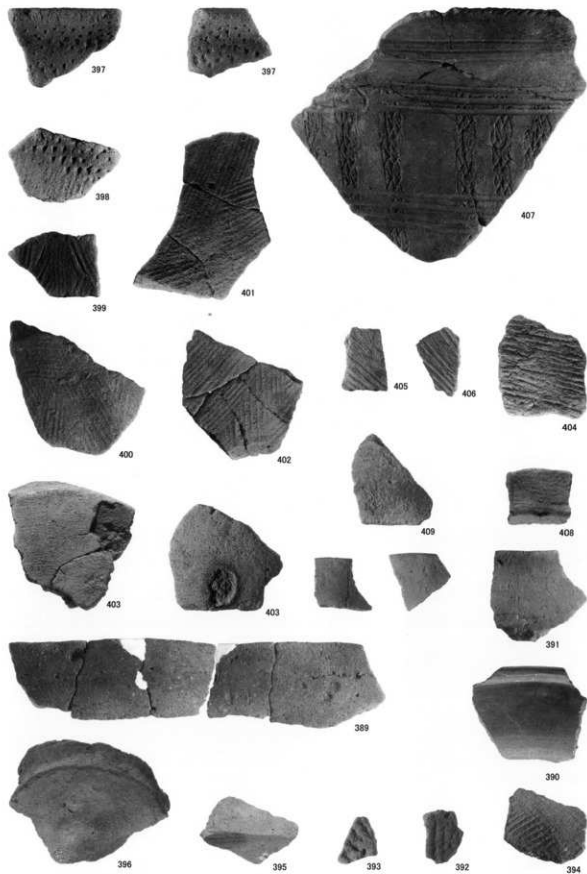
第7表 大迫遺跡 石器観察表



第68圖 大迫遺跡 石器 1



第69圖 大迫遺跡 石器 2



圖版47 大迫遺跡 遺物 1



410



411



416



417



414



421



422



413



412



415



419



423



424



418



420

図版48 大迫遺跡 遺物2

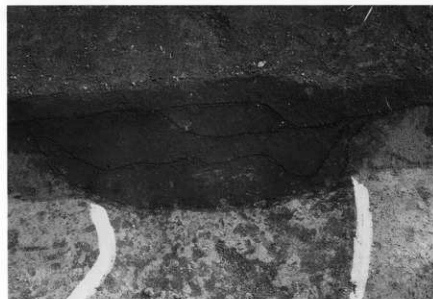


2区 土層断面
(南壁)



1区 III層上面 遺構完掘
状況
(東壁)

右斜下の一段低い調査区は2区
VII層上面完掘状況



溝2 土層断面



IV層上面 遺構検出状況
(東より)



IV層上面 柱穴検出状況



土坑3 検出状況



土坑3 土層断面1



土坑3 土層断面2



土坑3 土層断面3

圖版51 大迫遺跡 遺構3



土坑3 完掘状況



VII層 遺物出土状況1
(1区、東より)



VII層 遺物出土状況2
(2区、北東より)



土坑1 土層断面



Ⅷ層上面 遺構完掘状況1
(3区、東より)



Ⅷ層上面 遺構完掘状況2
(4区、西より)



図版54 大迫遺跡 遠景

※南より撮影

第Ⅷ章 飯野A遺跡の調査

第1節 調査の経過

1. 発掘調査の経過

本調査は平成13年12月25日から平成14年2月22日(32日間)まで行った。

以下日誌抄により発掘調査の経過を略述する。

12月25日(火)～27日(木)

遺跡周辺の環境整備及び安全対策を施す。

A-1区・B-2区を調査員立会いの下で重機により表土の除去の後、A-1区より掘り下げ。A-1区はVb層中まで削平を受けていたため、Vb層上面での検出を行った。B-2区北側はVb層上面まで削平を受けていた。

1月7日(月)～11日(金)

A-1区は遺構検出を行った後、写真撮影。

A-2・3区は調査員立会いの下で重機により表土の除去の後掘り下げ。A-1区同様Vb層中まで削平を受けていた。

B-2区はⅡ・Ⅲ・Ⅳ層を掘り下げ。

1月15日(火)～18日(金)

A-1区は平板実測した後、攪乱層部分を掘り下げ。

A-2・3区はVb層上面まで掘り下げ、遺構検出をした後検出状況写真撮影。

B-1区はVb層上面まで掘り下げ、遺構検出をした後、検出状況写真撮影、平板実測。

B-2区は精査を行うが雨により作業中止

1月21日(月) 降雨により発掘作業中止

1月22日(火)～25日(金)

A-1区は完掘した後、精査、完掘状況写真撮影、平板実測。Vb層を重機により除去した後、精査、遺構検出をしたが遺構は確認できなかった。VI層を掘り下げ。

A-2・3区は平板実測した後、攪乱層部分掘り下げ。完掘した後、精査、完掘状況写真撮影、平板実測。Vb層を重機により除去した後、精査、遺構検出をしたが遺構は確認できなかった。VI層を掘り下げ。

B-2区は精査をやり直した後、Ⅳ層・Va層の遺物出土状況写真撮影、遺物の取り上げ。南側に1号集石及び阿高式土器の集中出土を確認。

C-1・2区は調査員立会いの下で重機により表土の除去。C-1区とC-2区東側はVb層まで削平をうけていた。

1月28日(月)～2月1日(金)

A-1・2区は、VI・VII層掘り下げ。精査、出土状況写真撮影した後、遺物の取り上げ。VII層を掘り下げたが遺物は見当たらず、Ⅷ層上面で遺構検出を行ったが、遺構は確認できなかった。A-1区は土層断面実測。Ⅷ層上面で精査、完掘状況及び土層断面の写真撮影した後埋め戻し。

B-2区はVa層上面で遺構検出をしたところ土坑3基、柱穴を確認。精査した後、1号集石・阿高式土器の集中出土地点を含めた検出状況写真撮影。各遺構の掘り下げ。

C-1・2区はVb層上面まで掘り下げ、遺物がⅣ・Va層で出土。精査、出土状況写真撮影・遺物の取り上げの後、遺構検出を行い、検出状況写真撮影。攪乱を含めた遺構部分の掘り下げを行い、精査、平板実測、完掘状況写真撮影。その後C-1区はVb層を重機により除去。

2月4日(月)～8日(金)

A-1・2・3区は埋め戻し作業。

B-1区はミニトレンチを入れた結果、Vb層が他の区の堆積状況に比べて流動的であると思われることから先行トレンチを2箇所設定し人力によりVb層を掘り下げ。遺物は確認できなかった。

B-2区は1号集石、阿高式土器の集中出土の実測。遺物の取り上げ。

C-1区はVI層上面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。精査、検出状況写真撮影を行った後、VI層の掘り下げ。遺物の出土が認められ、精査、出土状況写真撮影した後、遺物の取り上げ。VII層上面で遺構検出を行ったところ土坑2基と柱穴を確認。精査、検出状況写真撮影した後、各遺構の掘り下げ、各遺構の完掘状況写真撮影。

C-2区はVb層を重機により除去した後、VI層上面で遺構検出、遺構は見当たらなかった。検出状況写真撮影の後、VI層の掘り下げ。

2月12日(火)～15日(金)

B-1区はVI層上面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。検出状況写真撮影の後、VII層の掘り下げ。VIII層上面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。トレンチ位置図作成。

B-2区はVa層掘り下げ、遺物は南側に出土。精査、出土状況写真撮影した後、遺物の取り上げ。Vb層上面で遺構検出を行ったが確認できなかった。精査した後、完掘状況写真撮影、遺構配置図の作成。Vb層を重機により除去した後、VI層上面で遺構検出、遺構は見当たらなかった。検出状況写真撮影の後、VI層の掘り下げ。

C-1区はVII層の掘り下げ、遺物及び2号集石を確認し、精査、出土状況写真撮影の後、遺物の取上げ。VIII層上面で遺構検出を行ったが、2号集石以外の遺構は確認できなかった。VIII層上面で精査、検出状況写真撮影した後、2号集石を実測。VIII層の掘り下げ、遺物は確認できなかった。IX層上面で遺構検出を行ったところ、土坑9基が検出。精査、検出状況写真撮影、平板実測、各遺構を掘り下げ、完掘状況写真撮影及び平板実測を行った。

C-2区はVI層の掘り下げ。遺物の出土が認められ、精査、出土状況写真撮影した後、遺物の取り上げ。VII層上面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。検出状況写真撮影の後、VII層の掘り下げをしたところ遺物が確認できた。精査、遺物出土状況写真撮影、平板実測の後、VIII層上面で遺構検出したが、遺構は確認できずVIII層を掘り下げたところ、遺物は確認できなかった。西端部より3号集石を検出した。IX層上面で遺構検出を行ったところ、土坑9基を確認。精査、検出状況写真撮影、平板実測の後、遺構部分の掘り下げ。その後精査、完掘状況写真撮影。3号集石の精査、検出状況写真撮影、実測。

2月18日(月)～22日(金)

B-1区はIX層上面まで掘り下げ、遺構検出を行ったが遺構の確認はできなかった。精査、完掘状況写真撮影。埋め戻し作業を行う。

B-2区はVI層掘り下げ、南側に遺物が出土。精査、出土状況写真撮影した後、遺物の取上げ。VII層上面で遺構検出したが遺構は確認できなかった。精査、検出状況写真撮影した後、2箇所先行トレンチを設定し、VIII層掘り下げ。遺物は2点確認でき、精査、出土状況写真撮影、遺物の取上げ。VIII層上面で遺構検出を行ったが遺構も同様に確認できなかった。VIII層を掘り下げたが遺物は見当たらず、IX層上面で遺構検出を行ったが、同様に確認できなかった。西壁の土層断面を実測。埋め戻し作業を行う。

C-2区は3号集石の実測及び取り上げ、掘り込み面を確認し掘り下げ。IX層上面で検出、精査、完掘状況写真撮影。南壁土層断面を実測。C-1区と合わせて埋め戻し作業。

第2節 発掘調査の概要

1. 本調査の概要

調査は、遺跡範囲内における道路敷地予定の幅4m、長さ200mの範囲を実施した。遺跡は現在では東から西へ緩やかに傾斜のあるほぼ平坦な地形であるが、もとは丘が波打つような地形であったのを、戦後まもなくして開墾等により整地したものであることであった(地元古老の話から)。現場周辺の露出した土層や、残存する旧地形を確認した上で、この台地の南側には2つの丘があったと推測される。地形的にみて台地中央よりやや北東側に位置する約73mの農道部分を「A区」、その南側の丘状に起伏した所から南東側を下る南側斜面約57mを「B区」、その西側に東から西に緩やかに下る農道部分(南西斜面)約64mを「C区」と呼称し、A区を南北に三分する形で北側を「A-1区」、中央を「A-2区」、南側を「A-3区」、B区を南北に二分する形で北側を「B-1区」、南区側を「B-2区」、C区を二分する形で東側を「C-1区」、西側を「C-2区」とした。調査区域の周囲のほとんどに茶樹が作付けされており、農閑期ではあったが茶樹への追肥等の作業を行うため時期であり、この農道が台地南側のA区北端で途切れ迂回路がなく、農機が移動及び稼働するための道路等を確保する必要がある等、現場運営に苦心した。

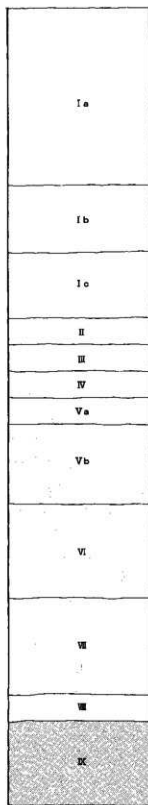
また調査地の農道が台地南側の偏辺部(C区)から丘状地形の端部を通り(B区)、元地形の矩を削平して作られた農道(A区)に至っており、掘削深度が深くなるに従い崩落の危険性もあったことと、矩面保護の意味から、Vb層から下の層は矩面下場から1m弱を残しての調査を行った。

調査はA区より行った。A区は元地形の矩を削平して作られた農道部分であり、前述したように迂回路が設定できず、A区先の畑地に茶樹の幼木を作付けする関係から早急に調査を完了する必要があった。A区の大部分がアカホヤ層(Vb層)まで削平を受けており、深いところではVI層まで削平されていた。アカホヤ層上面での遺物はほとんど見当たらず、削平により露出したVI層面で遺物が出土した。その後、矩面下場から1m弱を残してアカホヤ層を重機にて除去し、VI・VII・VIII層の掘り下げを行った。アカホヤ層下の残存状況は良好でVI・VII層中に遺物が出土した。遺構検出についてはVb層、VI層、VII層・IX層の上面で行ったが確認できなかった。

次にB区・C区の調査を行い表土の除去を行ったが、B-1区、B-2区の北側、C-1区はアカホヤ層(Vb層)まで削平を受けており、アカホヤ層上面、IV層・Va層で遺物が確認できたのは、B-2区南側、C-1区の一部、C-2区であった。特にB-2区南側IV層・Va層は遺物が集中しており、Va層中より阿高式土器が圧壊されたような状況で出土し、その北側から熱破砕が認められる礫によって形成された1号集石が検出された。その他、Va層上面で遺構検出を行った結果、B-2区より3基の土坑が検出された。B-1区は削平の関係からか遺物・遺構がほとんど見当たらなかったため、B-1区にVb層より2箇所先行トレンチを入れ下層を確認したが、IX層上面まで遺物、遺構とも確認できなかった。B-2区は調査区南側VI層中から熱破砕した形跡のある焼石と合わせて土器が出土し、遺構はVI層、VII層、IX層上面で検出したがいずれも確認できなかった。C-1区はVa層、VI層、VII層で土器を中心とした遺物が確認されたが、VI層、VII層では熱破砕した礫が多く出土し、VIII層中からは2号集石が検出された。遺構はVIII層上面で土坑2基、IX層上面で土坑9基確認できた。C-2区はC-1区と同様にVa層、VI層、VII層で土器を中心とした遺物が確認されたが、VI層、VII層では熱破砕した礫が多く出土した。VIII層中からは3号集石が調査区西側から検出され、集石を構成する礫は10cm程度の大きさであり、いずれの礫も熱破砕した形跡が見られた。また、集石内埋土の中央部から炭化物が微量ながら確認することができた。また掘り込み面も確認でき、検出面(IX層上面)から約20cm程度であった。遺構はIX層上面で土坑10基を確認できた。

これらの結果から、アカホヤ層よりも上層については削平の関係からはっきりしたことはわからな

いが、飯野A遺跡のあるこの台地の北東斜面、南西から南東にかけての斜面には縄文時代早期の生活圏があったことが推測され、Ⅵ層・Ⅶ層に出土した熱破砕痕の見られる焼石が、レベル的に高地から動いてきたと考え、C区北側に集落が形成されていた可能性も推測される。

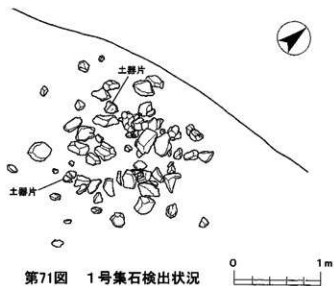


第70図 土層柱状図

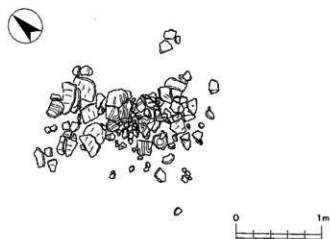
2. 層序

標準土層は下記のとおりである。

- | | | |
|-------|----------|---|
| I a 層 | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色土層：現耕作土で土粒はキメが細かくサラサラとしている。 |
| I b 層 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色土層：旧耕作土で上層よりも締まっている。土粒はキメが細かくサラサラとしている。 |
| I c 層 | 5YR1.7/1 | 黒色土：旧耕作上で、層中に攪乱にも似た混ざりが見られる。 |
| Ⅱ層 | 10Y8/1 | 灰白色砂層：直径2mm大の灰白色砂粒により形成される層。層全体に締まりはなくサラサラとしている。 |
| Ⅲ層 | 2.5YR2/1 | 赤黒色土層：土粒はキメが細かく締まった層である。層中に直径1～2mm程の橙色バミスを含む。 |
| Ⅳ層 | 10Y1.7/1 | 赤黒色土層：土粒はキメが細かくⅢ層よりも硬く締まった層である。層中にはほとんどバミスは見られない。縄文時代中期の遺物包含層である。 |
| V a 層 | 10YR7/8 | 黄橙色土層 アカホヤ層の2次堆積と思われる。下層（V b 層）に比べて層が柔らかい。縄文時代中期の遺物包含層である。 |
| V b 層 | 10YR6/8 | 明黄褐色土層：層中に直径3～4mm程の橙色バミスを含む硬く締まった層である。約6,300年前とされる鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰である。 |
| Ⅵ層 | 10YR7/4 | にぶい黄橙色粘質土層：土粒は微細でキメが細かく、層全体に粘りがあり締まっている。縄文時代早期の遺物包含層である。 |
| Ⅶ層 | N2/0 | 黒色粘質土層：土粒は微細でキメが細かく、層全体に粘りがあり締まっている。層中に直径2～5mm程の橙色バミスを含む。縄文時代早期の遺物包含層である。 |
| Ⅷ層 | N3/0 | 暗灰色粘質土層：土粒は微細でキメが細かく、層全体に粘りがあり締まっている。層中にはほとんどバミスは見られない。 |
| Ⅸ層 | 7.5YR2/1 | 黒色土：層中に黄白色ブロックを含む硬く締まった層である。約11,500年前とされる桜島起源のサツマ火山灰である。 |



第71図 1号集石検出状況



第72図 阿高式土器遺物出土状況

至らなかった。また集石内埋土中からは炭化物は見当たらず、掘り込み面は確認できなかった。

なお、遺物No427の阿高式土器が圧壊するようにVa層中より集中して出土し、この集石が検出された地点から南に2m程の地点に存在しているが、この集石との関連については特定できなかった。



第73図 2号集石検出状況

第3節 発掘調査の成果

縄文時代の集石遺構が遺跡南側のB-2区、C-1・2区に計3基、土坑がB-2区より3基、C-1・2区より21基検出された。

1. 集石遺構

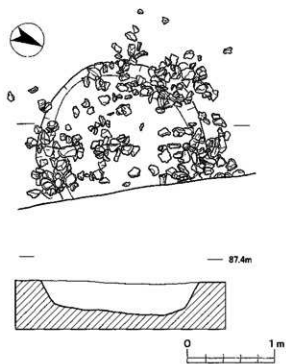
それぞれの集石は各遺物包含層（Va層・Ⅶ層・Ⅷ層）中より検出された。

(1) 1号集石

B-2区南西側、Va層中より1基の集石遺構が検出された。検出された状況から主たる集石の構成部分は、小礫が集中する長径70cm、短径50cmの楕円形を形成する範囲内にあると思われる。主たる集石の構成部分から外側に向かって各礫のレベルは高くなっており、Ⅳ層からVa層中に掘り込みを施した上で集石を作成し、その用途が完了した後に礫を取り払ったものではないかと思われる。集石を構成する礫は総数72個で、大小様々であるが、大きいもので15cm、小さいものは3cm程度であり、いずれの礫も熱破砕した様子が見られる。集石内からは2点の土器片とチャート片1点が出土したが、この遺物の時代を特定するには

(2) 2号集石

C-1区東側、Ⅶ層中より1基の集石遺構が検出された。Ⅶ層中には熱破砕した焼石が多数散在し、その中で小礫20個程度が散石に近い状態ではあるが、ある程度の範囲内で集中しているのが認められた。集石を構成する礫は総数25個で、ほぼ8cm程度の礫が主で、一部3cm程度の小礫も見られる。いずれの礫も熱破砕した様子がうかがえた。また、集石内に炭化物は見当たらず、掘り込み面は確認できなかった。



第74図 3号集石検出状況

(3) 3号集石

C-2区西側、縄文時代早期層（Ⅷ層）中より1基の集石遺構が検出された。検出された状況から主たる集石の構成部分は、小礫が集中する直径120cm程度の円形を呈する範囲内にあると思われる。集石を構成する礫は総数162個で、ほぼ10cm程度の大きさであり、いずれの礫も熱破砕した様子がみられる。また、集石内埋土の中央部から炭化物が微量ながら確認することができた。

集石の実測を行った後、サツマ火山灰層（Ⅸ層）上面で遺構検出を行ったところ、長径100cmの楕円形を呈する掘り込み面と思われるプランが検出された。プラン内埋土はⅧ層と思われ、掘り下げたところ、検出面（Ⅸ層上面）から約20cm程度の掘り込みが確認できた。

2. 土坑

それぞれの土坑は、Va層、Ⅷ層、Ⅸ層上面で検出を行った結果検出されたものである。各土坑の計測値は第8表に示してある。

(1) Vb層上面

B-2区より3基の土坑が検出された。それぞれの土坑の検出面で観察したところ、上層にあるⅣ層土がVa層に染みこむようにわずかに濁りが見られる検出であった。B1号土坑は楕円形を呈するプランであり、埋土はⅣ層+Va層にわずかに濁りが見られる土色であった。B2号土坑は楕円形を呈するプランであり、検出面埋土はⅣ層+Va層に濁りが見られる土色であったが、埋土下層はVa層に若干の濁りが入る土色が観察できた。この土坑は掘り込みが深く、埋土の状況からB1号・B3号土坑に比べて時代的にさかのぼることが推測される。なお遺物等は確認できなかった。B3号土坑は2つの円形の土坑が連結する形で検出され、埋土はⅣ層+Va層に濁りが見られる土色であった。

(2) Ⅷ層上面

C-1区より2基の土坑が検出された。それぞれの土坑の検出面で観察したところ、上層のⅥ層が若干濁る様子が見られる検出であった。C1号土坑は、2つの円形の土坑が連結する形で検出され、埋土は埋土下層に行くに従い、Ⅷ層の影響を受けて濁りが顕著に見られた。C2号土坑は溝状に南北に延びる楕円形を呈し、検出面からの深さは12cmである。埋土はC2号土坑同様に埋土下層に行くに従い、Ⅷ層の影響を受けて濁りが顕著に見られた。

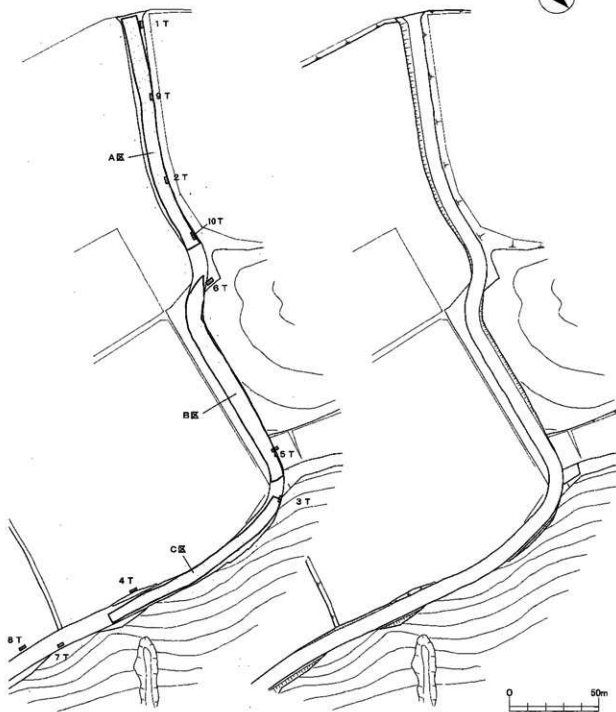
(3) Ⅸ層上面

C-1区より10基、C-2区より9基の土坑が検出された。いずれの土坑も検出面で観察したところ、

埋土の状況は締まった黒色上層であり、Ⅴ層に近い様子が伺えた。C-1区ではC3号～C12号土坑が検出され、C-1区西側に偏るように位置し、東端部には全く見当たらなかった。C3号・C4号・C6号・C7号・C8号・C10号・C11号土坑は全体プランがつかめなかった。埋土はC10号のみ埋土下層でⅣ層の影響を受けて濁りが顕著に見られた他はⅤ層に近い黒色上であった。C4号・C6号土坑は溝状に南北に延び、検出面からの深さはC4号が26cm、C6号が43cmで、底は平坦に近い。C8号・C10号は底の一部に凹みに近い落ち込みが確認された。C5号・C9号は楕円形を呈する土坑であり、C9号土坑は底が弧状にくぼみ、底の一部が凹みに近い落ち込みが確認された。C-2区ではC12号～C21号が検出された。C13号・C14号・C16号・C19号・C20号・C21号土坑は全体プランがつかめなかった。埋土はC17号・C18号・C20号は埋土下層でⅣ層の影響を受けてか濁りが顕著に見られた他はⅤ層に近い黒色土であった。C13号土坑は溝状に南北に延び、検出面からの深さは14cmで、底は弧状にくぼんでいた。C12号・C15号・C17号・C18号土坑は楕円形を呈する土坑であり、C12号・C17号・C18号土坑は底が弧状にくぼみが見られた。(出口)

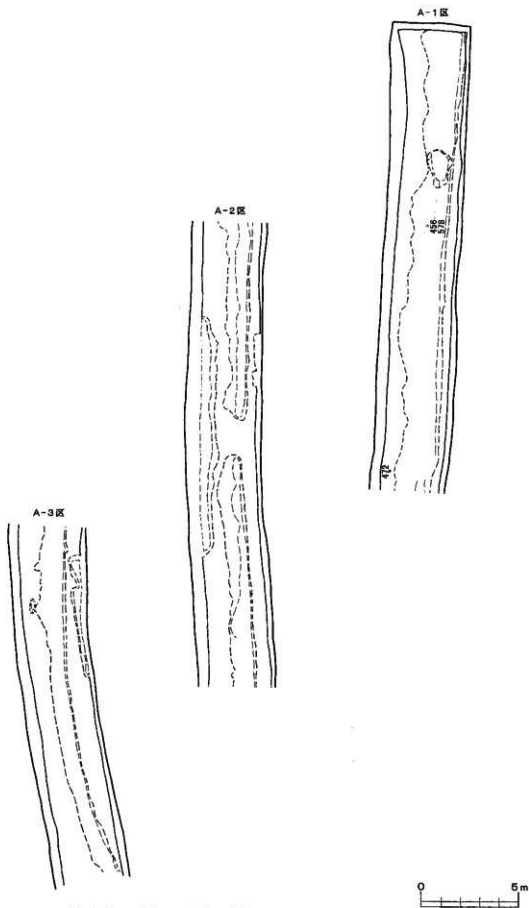
挿入 番号	土坑名	検出区	検出層	長径 (m)	短径 (m)	検出面から の深さ (m)
第83図	B S K 1	B-2区	Va層上面	0.9	0.8	0.09
第83図	B S K 2	B-2区	Va層上面	1.56	1.24	0.68
第83図	B S K 3	B-2区	Va層上面	1.36	0.78	0.09
第86図	C S K 1	C-1区	Ⅴ層上面	2.0	1.1	0.12
第86図	C S K 2	C-1区	Ⅴ層上面	0.64	0.42	0.12
第87図	C S K 3	C-1区	Ⅳ層上面	0.46	0.4	0.36
第87図	C S K 4	C-1区	Ⅳ層上面	0.72	0.39	0.26
第87図	C S K 5	C-1区	Ⅳ層上面	0.71	0.54	0.44
第87図	C S K 6	C-1区	Ⅳ層上面	0.80	0.29	0.43
第87図	C S K 7	C-1区	Ⅳ層上面	0.92	0.25	0.31
第87図	C S K 8	C-1区	Ⅳ層上面	1.26	0.6	0.26
第87図	C S K 9	C-1区	Ⅳ層上面	1.08	0.94	0.35
第87図	C S K 10	C-1区	Ⅳ層上面	0.98	0.63	0.23
第87図	C S K 11	C-1区	Ⅳ層上面	0.74	0.36	0.46
第87図	C S K 12	C-2区	Ⅳ層上面	1.04	0.58	0.11
第87図	C S K 13	C-2区	Ⅳ層上面	0.7	0.5	0.14
第87図	C S K 14	C-2区	Ⅳ層上面	1.14	0.55	0.36
第87図	C S K 15	C-2区	Ⅳ層上面	0.74	0.47	0.15
第87図	C S K 16	C-2区	Ⅳ層上面	0.83	0.34	0.19
第87図	C S K 17	C-2区	Ⅳ層上面	0.70	0.45	0.31
第87図	C S K 18	C-2区	Ⅳ層上面	0.57	0.42	0.24
第87図	C S K 19	C-2区	Ⅳ層上面	1.14	1.04	0.21
第87図	C S K 20	C-2区	Ⅳ層上面	0.97	0.86	0.2
第87図	C S K 21	C-2区	Ⅳ層上面	0.61	0.6	0.27

第8表 土坑計測表

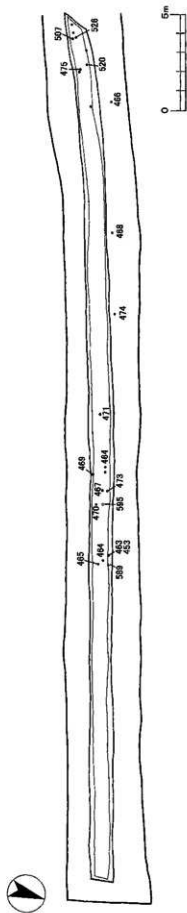


第75図 確認調査トレンチ位置図及び
本調査調査区設定図

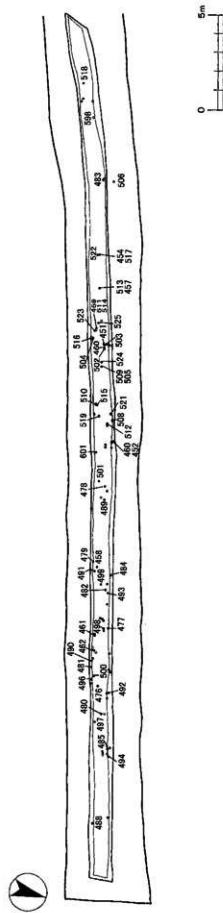
第76図 飯野A遺跡付近工事計画図



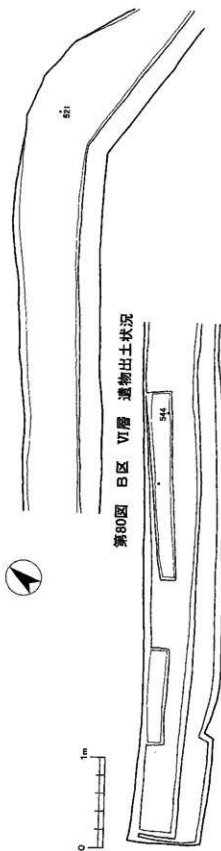
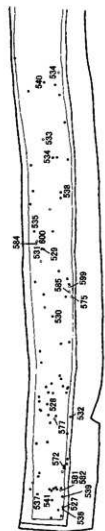
第77図 A区 Va層 遺物出土状況及び攪乱状況



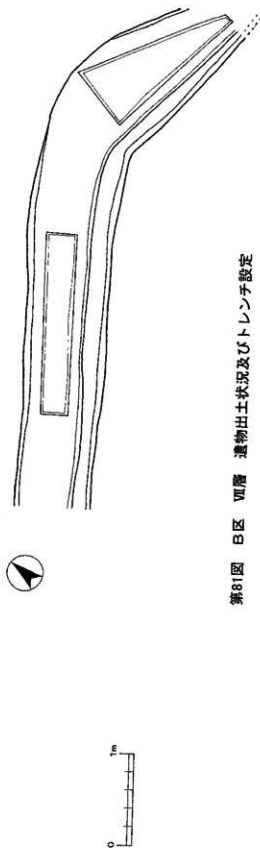
第78図 A区 VI層 遺物出土状況



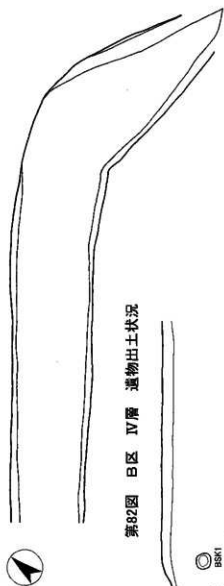
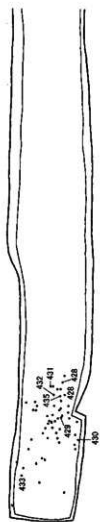
第79図 A区 VII層 遺物出土状況



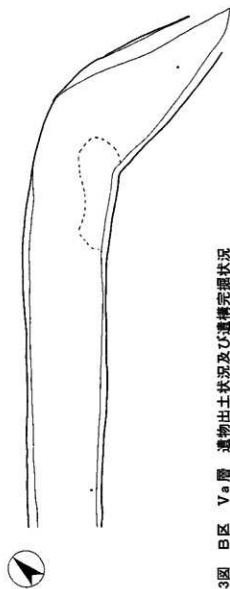
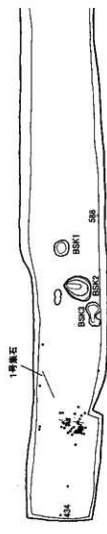
第80図 B区 VI層 遺物出土状況



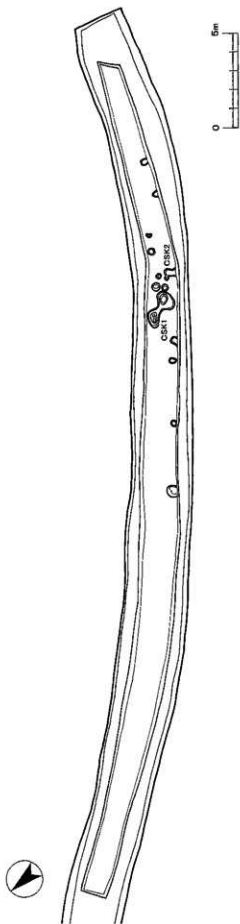
第81図 B区 VII層 遺物出土状況及びトレンチ設定



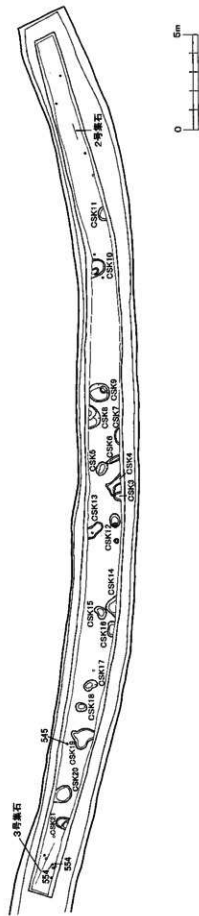
第82図 B区 IV層 遺物出土状況



第83図 B区 Va層 遺物出土状況及び遺構完備状況



第86圖 C区 VII層上面 遺構檢出状況



第87圖 C区 VII層 遺物出土状況及C区層遺構檢出状況

第4節 遺物

以下、遺物について述べる。遺物の出土・分布状況については、前述の調査担当者の報告を参照されたい。縄文時代早期貝殻文系土器の形式名については凡例に記したとおりである。

1. 土器

a. 確認調査・表探

確認調査において、1トレンチより451・452・454・456・458～460、2トレンチより455、8トレンチより453、9トレンチより457が出土している。出土した土器は縄文時代前期の曾畑式、縄文時代早期の前平式などが見られ、広い範囲にわたって縄文時代早期の包含層の存在が予想された。

また、当遺跡の表探資料には縄文時代中期・歴史時代の土器が見られ、早期以外の包含層も残存する可能性が考えられた。

確認調査 451～459

451・454・456～460は前平式と考えられる。口縁部451は口唇部外側に縦位の貝殻腹縁を刺突したキザミが施される。その下には横位の貝殻刺突文が見られる。その他の胴部片には斜め・横方向の貝殻痕文が施される。456には貝殻痕の器面に斜位の貝殻刺突文がめぐっている。

453は貝殻痕で施された沈線が羽状文を描いており、曾畑式と思われる。

452は斜め方向の貝殻痕文を施した外面に、複数の縦位の貝殻腹縁文が並行する。加栗山式と考えられる。

胴部455は横方向の貝殻痕文を施した器面に縦位の短い貝殻痕が見られる。桑ノ丸式と考えられる。

表探 557～571

561は指頭により描かれたと思われる凹線文が見られる。口縁部558には口唇部にキザミと口縁端部に刺突が施され、いずれも指頭によるものと考えられる。刺突には爪跡も残る。阿高式系土器と考えられる。

559は羽釜の受口と思われる。時期は古代であろうか。

560には断面が台形の突帯が貼り付けられ、弥生土器もしくは円筒埴輪と思われる。

b. 本調査

以下、本調査における地区・層位ごとに出土土器のおもな特徴を述べる。

B区Ⅳ層 428～435

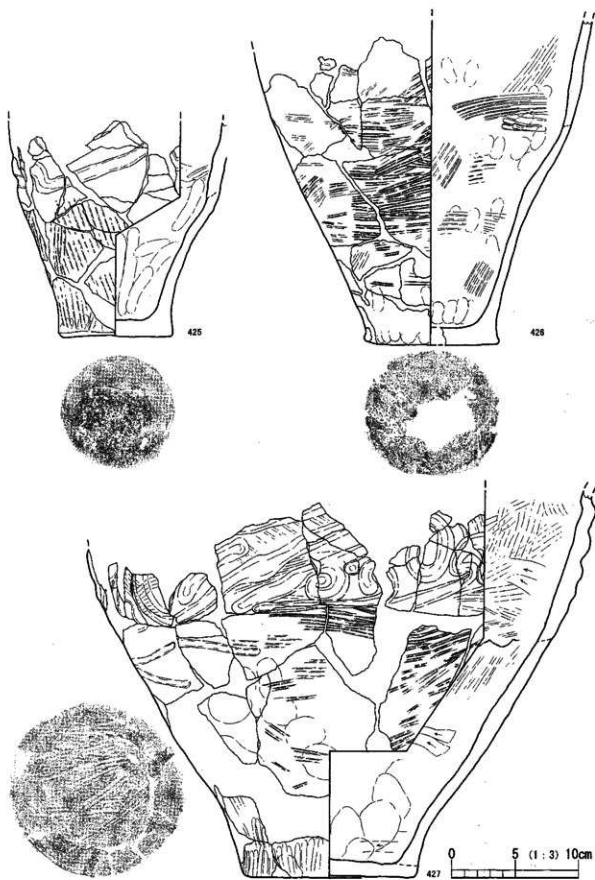
425・427は胴部外面の上半に指頭で施された凹線で幾何学模様が描かれる。外面は貝殻痕文で整え、胴部下半などの一部にナデを施している。内面には外面の凹線により緩やかな凹凸が見られる。器面は貝殻痕文が施されている。ただし、内面の下半分はナデが施される。阿高式系土器と考えられる。

426は形態が425に類似するが、外面に凹線は施されない。器面はおもに貝殻痕文で整えてある。

428は大きく肥厚する口縁端部に明瞭な稜線をもった段をもち、面をもつ口唇部は見られない。口縁端部には不明瞭な凹線が2条めぐる。431～433・435の器面は磨かれている。これらは類似しており同一個体の可能性が考えられる。形式は中岳Ⅱ式であろうか。

429・430は外開きの口縁に平坦な口唇部をもち、外面には明瞭な凹線で文様が描かれる。

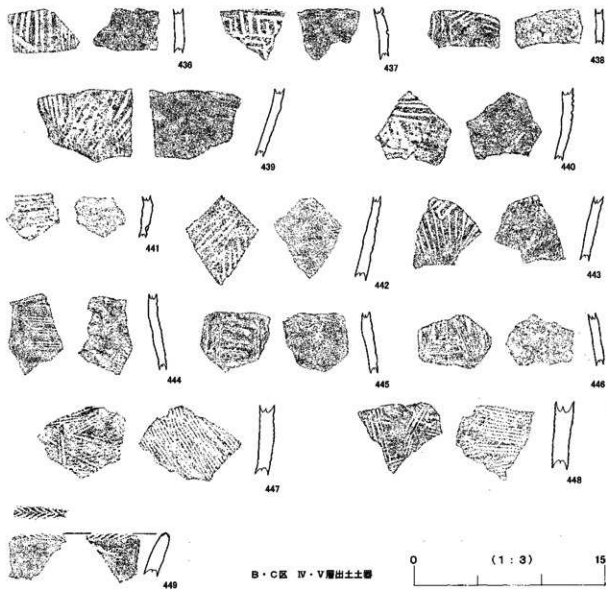
B・C区Ⅳ・Ⅴ層 436～449



第88図 飯野A遺跡 土器1



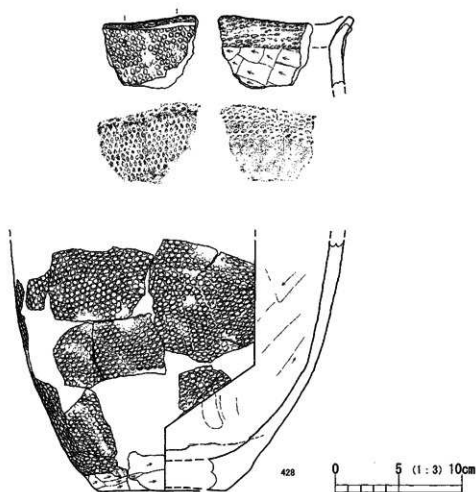
B区 IV層出土土器



B・C区 V・V層出土土器

0 (1:3) 15cm

第89図 飯野A遺跡 土器2



第90図 飯野A遺跡 土器3

436~438・443は工具状の施文原体により沈線が施される。他のものには貝殻条痕による沈線を施している。449を除いて全て曾畑式と考えられる。

449は口唇部に羽状のキザミをもつことから、塞ノ神様式と思われる。

A-1区 VI層 461~475

前平式が多く見られるが岩本式も1点含まれる。

口縁部461は口唇部内側に段をもち、口唇部外側にはヘラ状工具による深いキザミが施される。内外面には斜め方向の貝殻条痕が見られる。形式は岩本式と考えられる。

462は外面に上下の突帯に挟まれた円形の刺突が見られる。貝殻条痕系土器と思われず、隆帯文土器であろうか。

胴部463~472は斜め・横方向の貝殻条痕が施される。施文される貝殻条痕からは数種の施文原体が想像され、複数個体の土器と考えられる。473のみは外面に横方向のケズリが施される。形式は前平式と考えられる。

底部474・475の外面には横方向の貝殻条痕が施される。474の底部外面には縦位のヘラ状工具によるキザミが施されている。形式は前平式と考えられる。

A-1区 VII層 476~501

口縁部477~479は口唇部内側に段を、外側に深いキザミをもっている。形式は岩本式と考えられる。477・478は貝殻腹縁で施されたキザミの下に、斜位の貝殻腹縁刺突文をめぐらす。479のキザミも貝殻腹縁による。477~478の外側調整は貝殻条痕と同じであるが、内面は477が貝殻条痕、478が木口状工具によるケズリ、479がケズリと異なっている。

476は平坦な口唇部をもち、口縁端部に横位の2条の刺突文がめぐる。その下には貝殻条痕により襷杉文が描かれている。内面は斜め方向のケズリで調整される。形式は石坂式と考えられる。

口縁部481は平坦な口唇部にキザミをもち、口縁端部に横位の貝殻刺突文と押引文が並行する。形式は吉田式と考えられる。

口縁部480・482・483は前平式と考えられる。480・482は口唇部外面にキザミを施すが原体が異なり、480のキザミは貝殻腹縁、482はヘラ状工具による。483は口縁端部に縦位の2段のキザミをめぐらす。外面調整は方向が異なるが、いずれも貝殻条痕が施される。内面調整は482が貝殻条痕、480が斜め方向を下から上に向かうケズリ、483には下から上へ向かうケズリが見られる。

各胴部片は外面に貝殻条痕が見られる。底部500は外縁をナデで仕上げ条痕を消している。501は外縁まで貝殻条痕を残している。胴部・底部は前平式と思われる。

A-2区 VII層 450

450は胴部下半部が良好な状態で残存しており、口縁部も一部が出土している。器面には外面全体と口縁部の内面に押型文を施している。内面の頸部から下と外面の底部外縁にはケズリが施されている。

A-2区 VII層 502~525

502は直行する口縁端部の外面に、3条の貝殻腹縁刺突文が横位に連続して施されている。

503は口唇部が平坦に仕上げられ、口縁端部に3条の貝殻腹縁刺突文が連続して横位に施される。口縁部は直行する。504は肥厚した口縁端部が外反している。口唇部には浅いキザミを施し、口縁端部には羽状の貝殻刺突が見られる。505も肥厚した口縁部がやや外反する。口縁端部外面には数条の貝殻刺突が横位に施されている。502~505は石坂式と考えられる。

506は口縁端部の外面に縦位のキザミを2段めぐらし、口唇部には平坦で幅広く、浅いキザミが施される。507・508は口唇部外側に貝殻腹縁の刺突による縦位のキザミを施している。506~508は前平式と考えられる。

胴部508~521は509を除き、貝殻条痕文が施されている。509は外面に押引文が見られ、吉田式と考えられる。

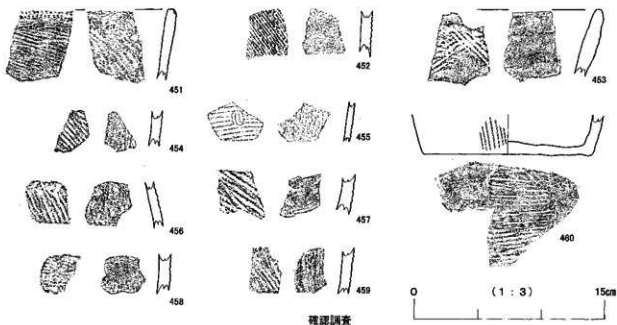
底部は522が底部外縁にキザミをもち、523・526は貝殻条痕をナデ消している。

B区 VI・VII層 527~544

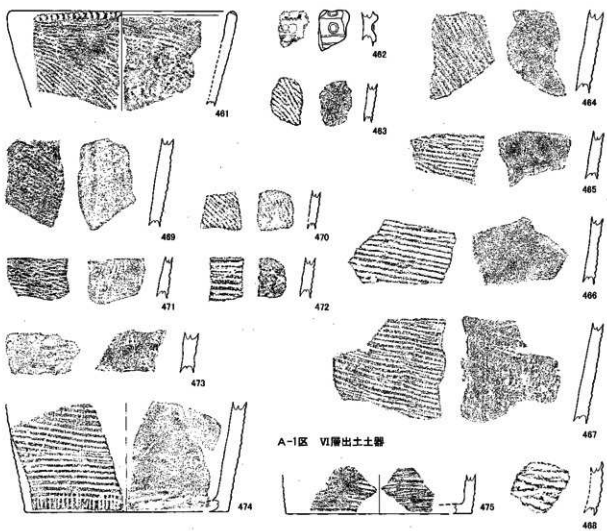
VII層出土は541・544のみ、他はVI層出土である。

口縁部527・532は口唇部外側にキザミをもち、口縁端部には円形刺突に挟まれた沈線が施文される。529は平坦な口唇部をもち、口縁端部に沈線とキザミが施されている。いずれも平椀様式と考えられる。

531は口唇部に深いキザミを施し、口縁端部外面に5条の並行した沈線をめぐらしている。528・530の内外面は無文である。いずれも壺ノ神様式と考えられる。

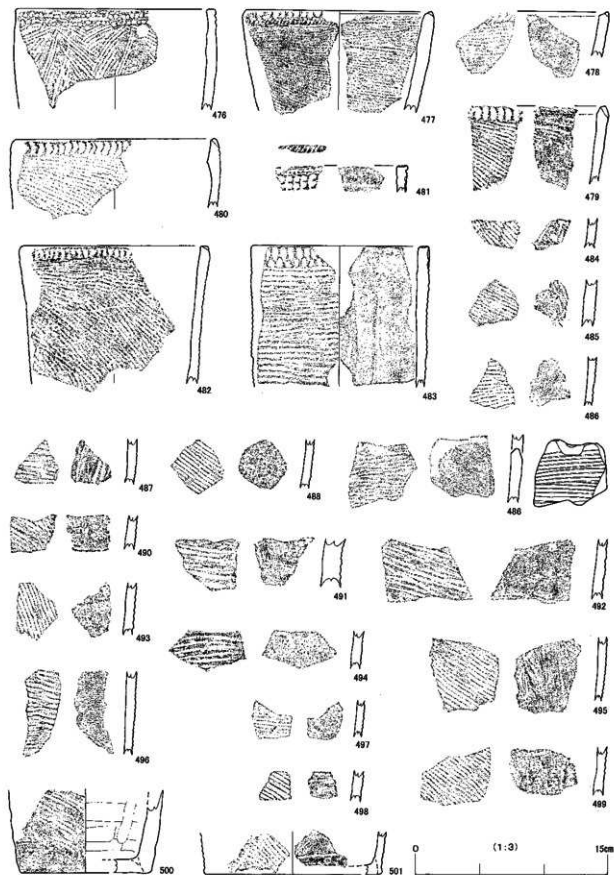


確認調査

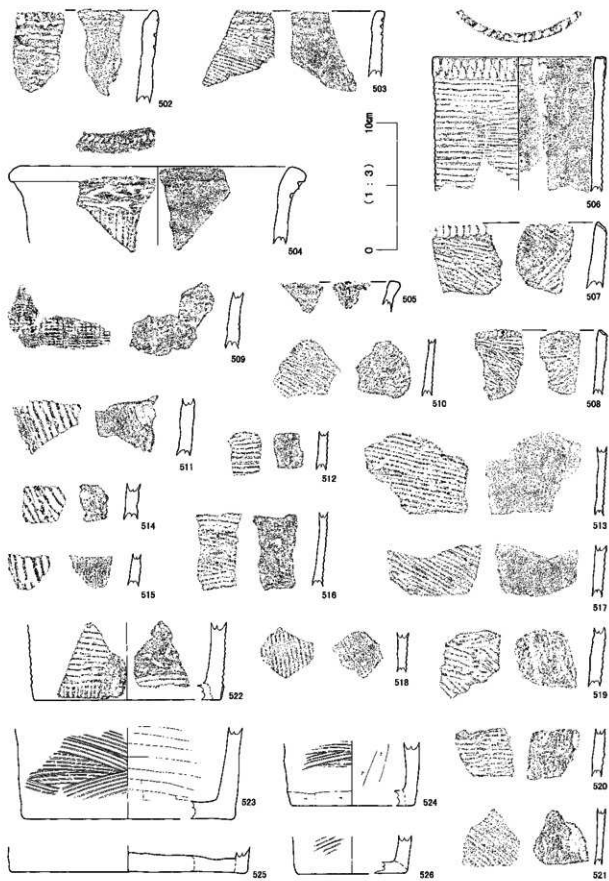


A-1区 VI層出土土器

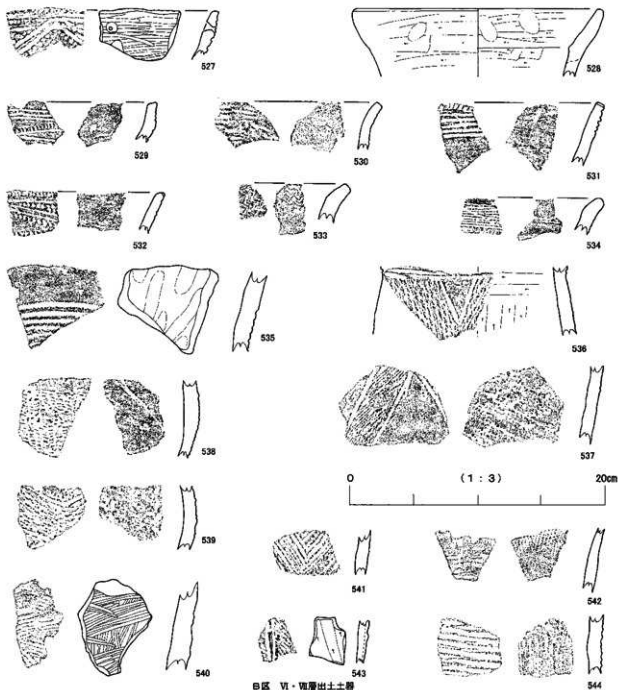
第91図 飯野A遺跡 土器4



第92図 飯野A遺跡 土器5



第93図 飯野A遺跡 土器6



第94図 飯野A遺跡 土器7

口縁部533は口縁端部の内外面に山形の押型文を施されている。

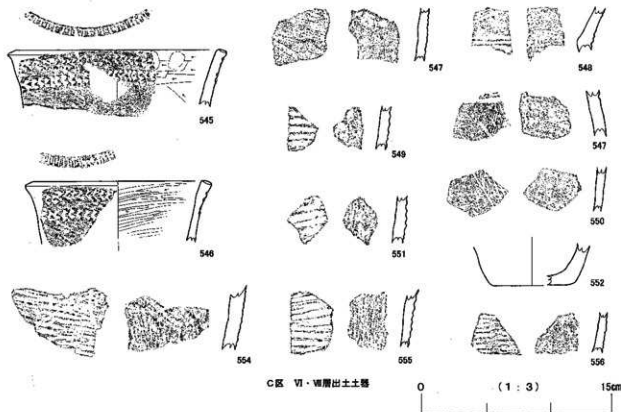
口縁部534は丸い口唇部をもち、口縁端部外面には密に並行した9条の沈線がめぐっている。

胴部536～539は沈線に区切られた燃糸文が見られる。536・537と538・539はそれぞれ同一個体の可能性が考えられる。535は4条の並行する沈線が施されている。いずれも塞ノ神様式と考えられる。

540は短い貝殻条痕による沈線が見られ、桑ノ丸式と考えられる。

541は綾杉状の貝殻条痕が施されており、石坂式と考えられる。

543はクサビ形貼付文が見られ、加栗山式と考えられる。



第95図 飯野A遺跡 土器B

C区 VI・VII層 545～556

545・546・554のみがⅦ層より出土した。他はⅥ層出土である。

口縁部545・546は口縁部が直行して、平坦な口唇部に浅いキザミをもっている。口縁部外面には縦位の貝殻縁刺突を2条めぐらせている。倉園B式と考えられる。

548・550・552には、沈線で区切られた熱糸文帯が見られる。塞ノ神様式と考えられる。

他の土器には貝殻条痕文が施されており、前平式と考えられる。

2. 石器 572～602・788

Ⅳ・Ⅴa層より574・788・586～588・590～594が出土、Ⅵ・Ⅶ層からは572・573・575～585・589・595～602が出土した。

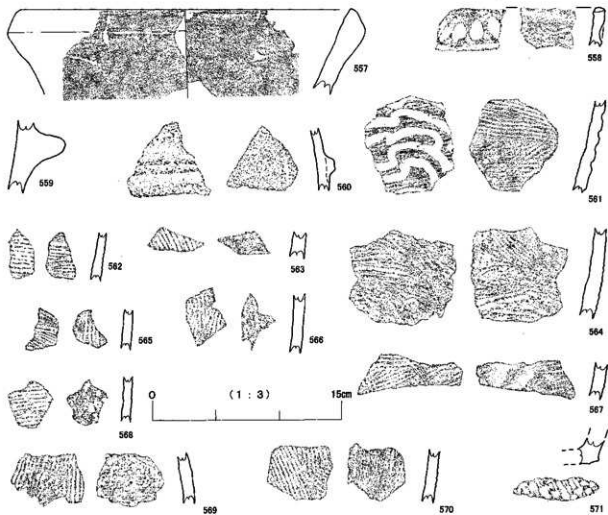
Ⅳ・Ⅴa層 574・788・586～588・590～594

石器は石鏃2点、打製石斧2点、磨石3点、叩石2点が出土した。

石鏃574は脚部の成形途中で折れ、製作をやめた未製品と考えられる。主刺離面を残す。石鏃788は完形で器面全体が均一に風化・摩滅するが、先端部の摩滅は他に比べてやや激しい。

剥片586は原礫面の残る剥片であるが、縁辺に微細な剥離が見られる。使用痕の可能性が考えられる。

打製石斧587は挾入部と刃部に摩滅が見られ、とくに刃部の摩滅は激しい。人為的な摩滅と思われ使用痕と考えられる。石材には0.1mm大の孔が見られる。打製石斧588は整形後に器面を粗く磨いて



第96図 飯野A遺跡 土器9 (表探)

いる。石材には0.1mm大の孔が多く見られる。

磨石590・591はやや歪んだ円形を呈して器面が丁寧に磨かれる。平坦な磨耗面は590にのみ1面が見られる。592は平坦な磨耗面を表裏2面もち片面には細かい擦痕が密に見られる。側面に明瞭な敲打痕は見られない。

叩石593は不明瞭な敲打痕が器面全体に見られるが、敲打痕の集中する部分は明瞭である。叩石594は上下対になった敲打面をもち敲打痕は深く明瞭かつ密である。他の面は丁寧に磨かれている。

VI・VII層 572・573・575～585・589・595～602

石器は石鏃2、搔器1点、楔形石器2点、石匙1点、凹石1点、磨石6点、叩石2点が出土した。

石鏃572は長さ1.4cmと小さく、重量も0.3gと軽い。側辺は一辺のみを成形しており未製品と考えられる。両面には主剥離面を残る。石鏃573は破損しており脚部にみが残存する。石材は黒曜石で白色を帯び不透明であることから姫島産と思われる。

搔器575は刃部と思われる下辺を丁寧に磨く。両面には主剥離面が残る。

楔形石器576・577はともに上端部が破損して使用を終えている。576の石材は白色のチャートであ

押出 番号	遺物番号	出土位置		種 類	器 種	石 材	法 量 (cm, g)			
		地点	層位				最大長	最大幅	最大厚	重量
574	699	C-2区	Va	剥片石器	石鏃	チャート	2.50	2.05	0.95	3.60
788	(確認)	8 T	V	剥片石器	石鏃	頁岩	2.35	1.80	0.30	0.70
586	608	C-2区	Va	剥片石器	剥片	頁岩	4.90	3.95	1.10	14.90
587	表採	—	—	礫石器	打製石斧	頁岩	10.95	6.20	1.15	92.50
588	374	B-1区	IV	礫石器	打製石斧	安山岩	5.95	8.00	1.40	84.80
590	619	C-2区	Va	礫石器	磨石(丸)	砂岩	5.30	5.23	4.12	148.70
591	618	C-2区	Va	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	6.00	5.03	4.15	182.40
592	610	C-2区	Va	礫石器	磨石	砂岩	10.92	10.13	4.60	674.00
593	604	C-1区	Va	礫石器	叩石	砂岩	5.30	5.60	4.28	166.80
594	612	C-2区	Va	礫石器	叩石	砂岩	5.80	5.00	4.15	164.00
572	498	B区	VI	剥片石器	石鏃	頁岩	1.40	0.85	0.30	0.26
573	651	C-1区	VI	剥片石器	石鏃	黒曜石	1.25	0.90	0.40	0.33
575	468	B区	VI	剥片石器	搔器	チャート	2.37	2.10	0.60	3.30
576	675	C-2区	VI	剥片石器	楔形石器	チャート	1.65	1.90	0.50	1.60
577	441	B区	VI	剥片石器	楔形石器	頁岩	2.40	2.20	0.90	3.50
578	2	A-1区	VI	剥片石器	剥片(R.F)	チャート	2.98	1.60	1.20	5.30
579	85(確認)	9 T	VII	剥片石器	剥片	安山岩	2.95	3.25	0.70	6.50
580	62(確認)	5 T	VII	剥片石器	剥片(R.F)	チャート	1.60	1.80	1.15	2.80
581	427-1	B区	VI	剥片石器	剥片	チャート	1.25	1.20	0.35	0.43
582	427-2	B区	VI	剥片石器	剥片	黒曜石	1.65	1.05	0.40	0.53
583	73(確認)	5 T	VII	剥片石器	剥片	チャート	2.00	1.80	0.35	1.20
584	477	B区	VI	剥片石器	石匙	チャート	6.70	5.60	1.30	42.90
585	469	B-2区	VI	剥片石器	剥片	安山岩	5.10	7.85	1.65	65.90
589	50	A-1区	VI	礫石器	凹石	砂岩	8.60	5.20	3.30	156.80
595	52	A-1区	VII	礫石器	磨石	砂岩	9.10	6.33	5.50	401.00
596	654	C-1区	VI	礫石器	磨石	砂岩	10.40	8.40	5.14	586.00
597	100	A-2区	VII	礫石器	叩石	砂岩	8.85	6.85	5.85	373.00
598	86	A-2区	VII	礫石器	叩石	砂岩	8.80	7.05	6.55	495.00
599	470	B-2区	VI	礫石器	磨石	砂岩	9.38	8.28	5.10	496.00
600	478	B-2区	VI	礫石器	磨石	砂岩	9.40	9.20	5.58	632.00
601	62	A-1区	VII	礫石器	磨石	砂岩	13.70	10.35	6.00	1100.00
602	437	B-2区	VI	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	6.43	5.11	4.33	124.79

第9表 飯野A遺跡 石器観察表

る。

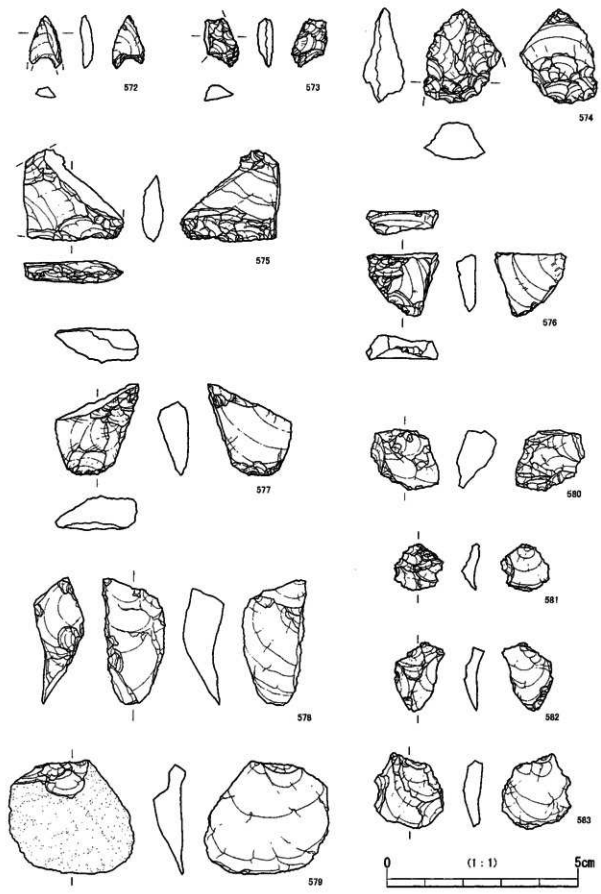
584石匙は切っ先と思われる先端部が欠損する。左右両辺とも丁寧に調整を施すが、右辺に欠損が見られ刃部と思われる。また、調整も右辺が表裏に剥離が見られて間隔もあかない。

剥片578・580には二次加工の痕跡が見られる。剥片582は黒曜石であるが緑色を帯びて不透明である。

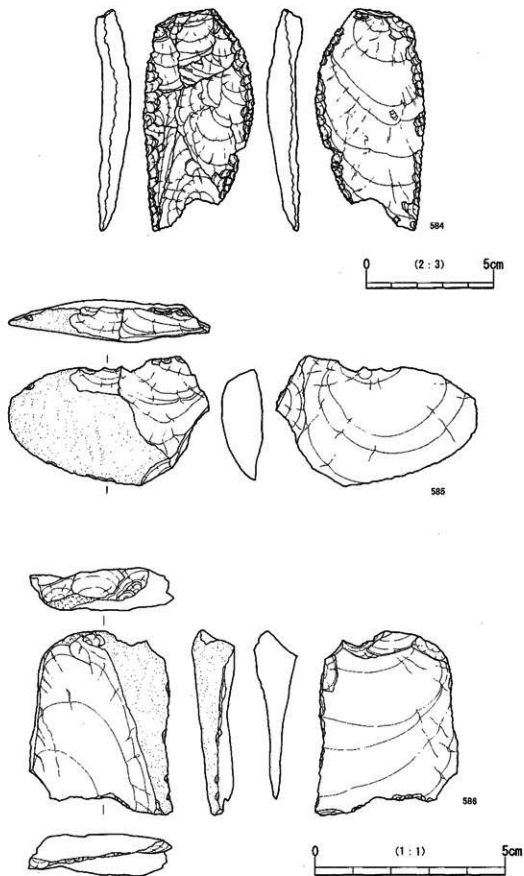
凹石589は両面に凹みが見られる。器面は激しく摩滅して器面の調整痕などは見られない。

磨石595には平坦な磨耗面が見られず、他の面に比べてやや平坦な面に擦痕が見られる。

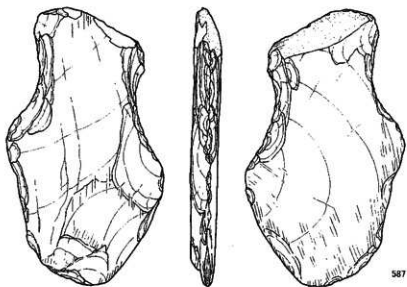
磨石596は磨耗面を二つものが一方は平坦またはやや窪み、他方は緩やかな凸面となる。側面やや尖った部分には敲打痕が集まる。敲打痕は深く明瞭である。なお、器面には剥離が多く見られて、



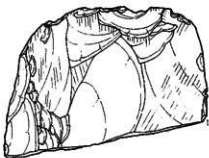
第97図 飯野A遺跡 石器 1



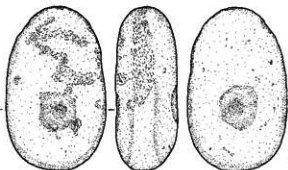
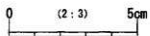
第98図 飯野A遺跡 石器2



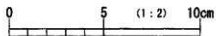
587



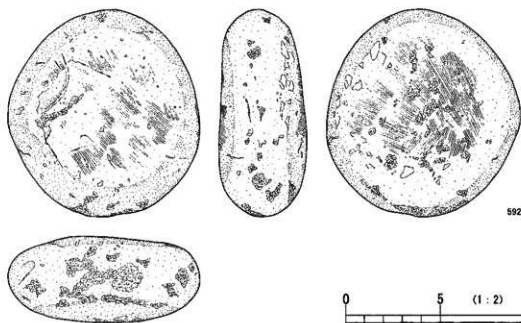
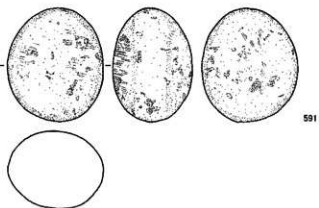
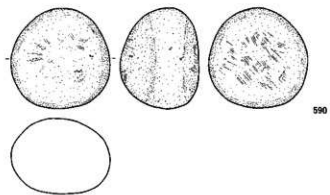
588



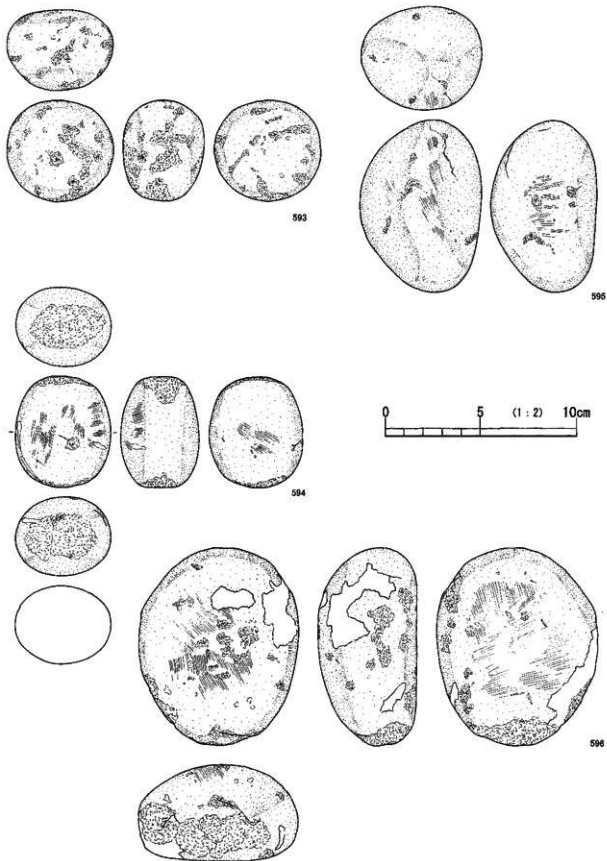
589



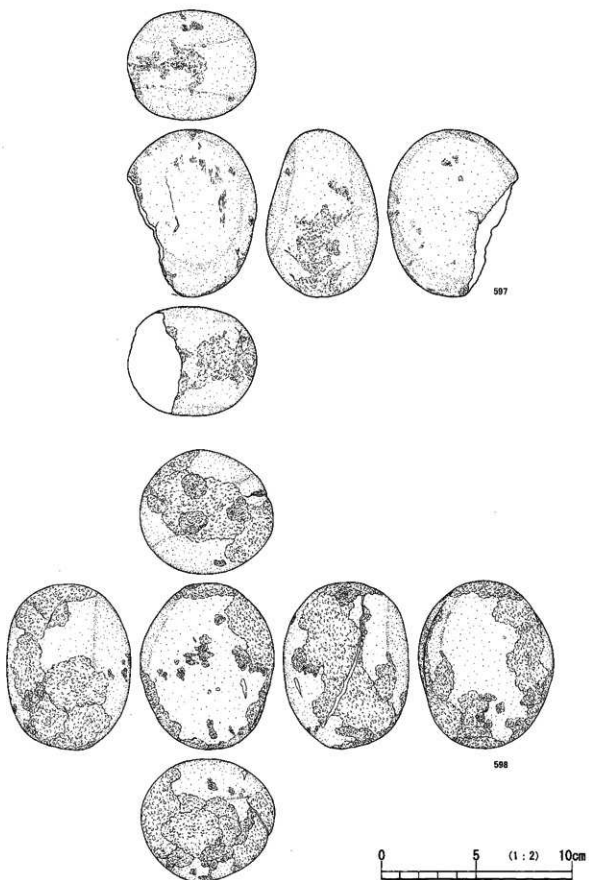
第99図 飯野A遺跡 石器3



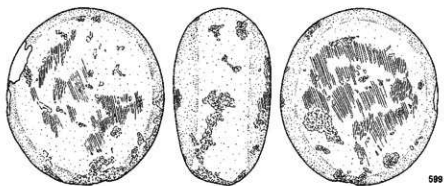
第100圖 飯野A遺跡 石器4



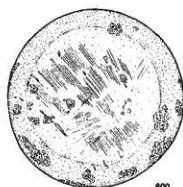
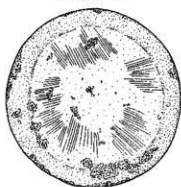
第101図 飯野A遺跡 石器5



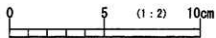
第102圖 飯野A遺跡 石器6



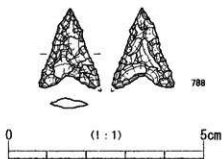
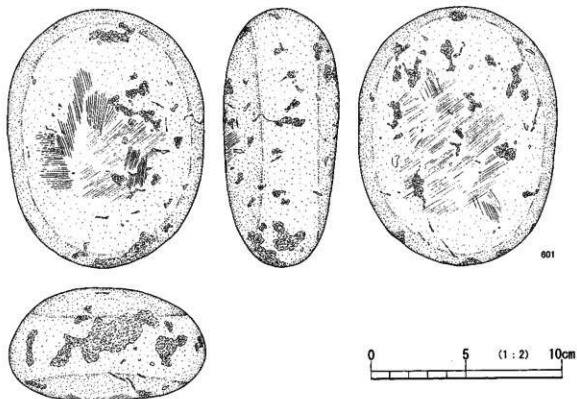
589



600



第103図 飯野A遺跡 石器7



第104図 飯野A遺跡 石器 8

やや赤みを帯びることから、加熱を受けた可能性が考えられる。

磨石599はやや脹らんだ2面の磨耗面をもち、側面に大きな剥離がある。磨耗面や側面にも細かい剥離が見られる。やや赤みを帯びており、加熱を受けた可能性が考えられる。

磨石600は、脹らみをもった2面の磨耗面をもつが擦痕は明瞭ではない。側面には数箇所浅浅い敲打痕が見られるが下端の敲打痕は深く明瞭である。

磨石601は、器面が丁寧な磨かれるが明瞭な擦痕は見られない。側辺の下端に浅く細かい敲打痕が存在する。

磨石602は、やや歪んだ楕円形を呈して器面が磨かれる。敲打痕などは見られない。

叩石597は、平坦な磨耗面を1面もち側面に浅く不明瞭な敲打痕が見られる。全体に赤みを帯びており、加熱を受けた可能性が考えられる。器種としては磨石が妥当である。

叩石598は側辺全体に敲打痕が見られ、上下の面はともに敲打痕が深く明瞭でおかつ密である。

(東)



427



425

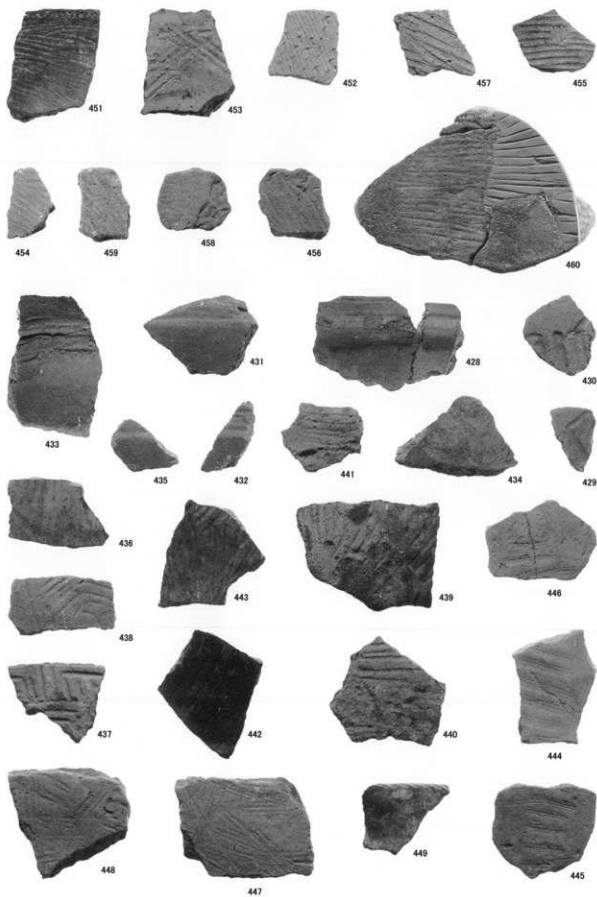


426

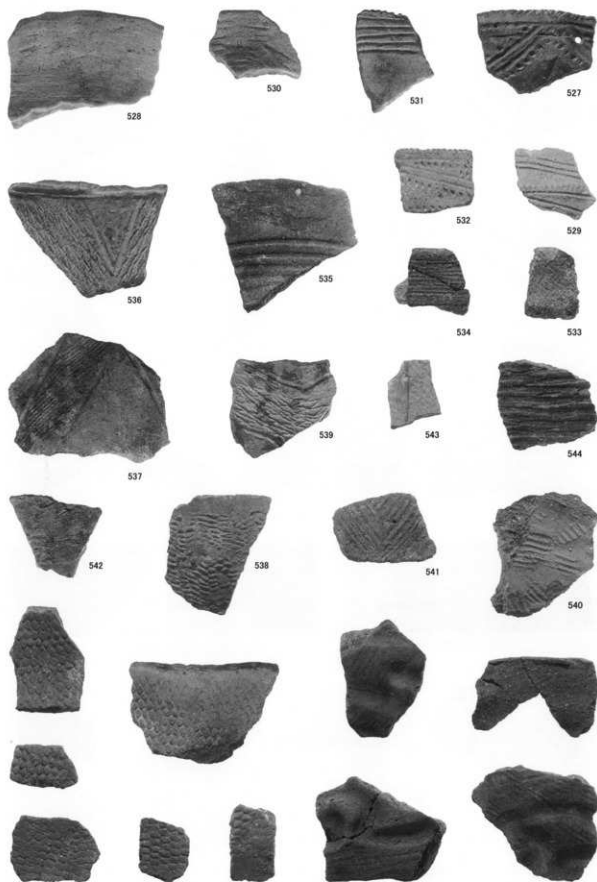


450

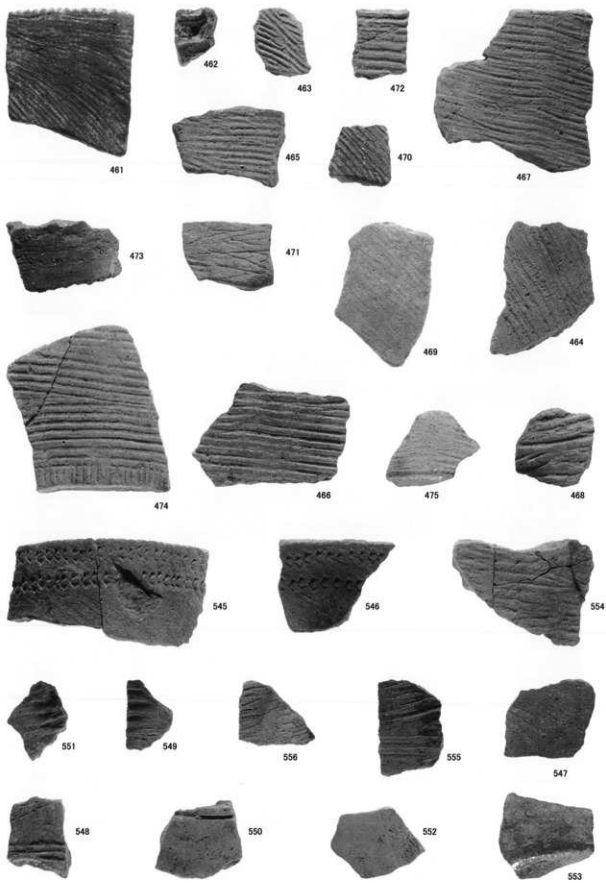
図版55 飯野A遺跡 遺物1



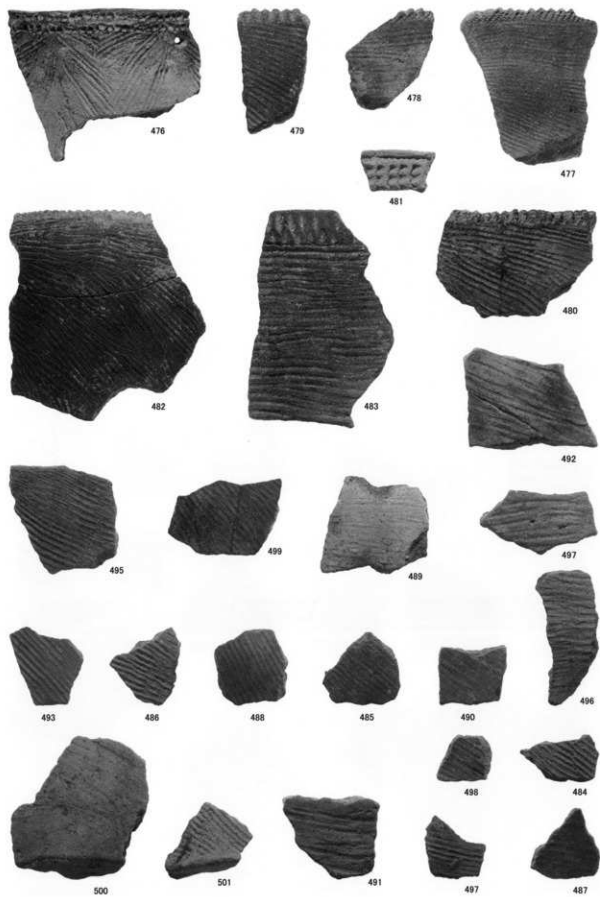
図版56 飯野A遺跡 遺物2



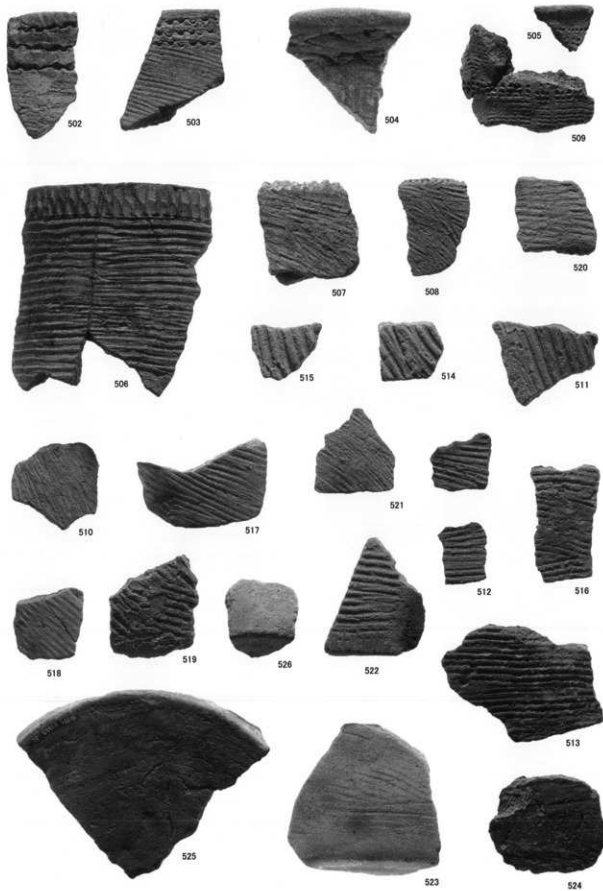
図版57 飯野A遺跡 遺物3



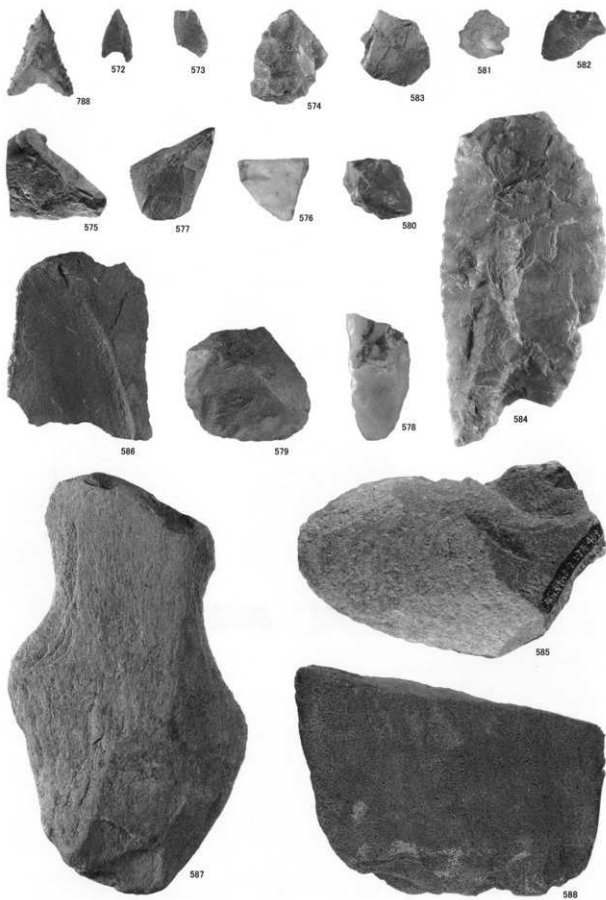
図版58 飯野A遺跡 遺物4



図版59 飯野A遺跡 遺物5



図版60 飯野A遺跡 遺物6



図版61 飯野A遺跡 遺物7



594



593



590



591



589



598



597



595



602



600



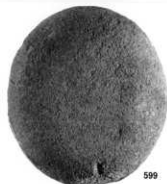
592



601



596



599

図版62 飯野A遺跡 遺物8



A-1・2区
VI・VII層
遺物出土状況
(南西より撮影)



B-2区
IV・Va層
遺物出土状況
(南西より撮影)



B-2区
Va層
阿高式土器集中出土及び
1号集石検出状況
(北東より撮影)



B-2区
Va層
1号集石検出状況
(東より撮影)



B-2区
Va層
阿高式土器集中出土状況
(西より撮影)



B-2区
VI層
遺物出土状況
(南西より撮影)

図版64 飯野A遺跡 遺構2



C-1区
VI層
遺物出土状況
(西より撮影)



C-2区
VI層
遺物出土状況
(西より撮影)



C-2区
VII層
遺物出土状況
(西より撮影)



C-2区
IX層
遺構完掘状況
(西より撮影)



C-2区
南側土層断面状況
(北東より撮影)



A-1区
北西側土層断面状況
(東より撮影)



B-2区
Va層上面
2号土坑完掘状況
(北西より撮影)



C-2区
3号集石検出状況
(南東より撮影)



C-2区
3号集石掘り込み面完掘状
況
(西より撮影)



図版68 飯野A遺跡 遠景

※南より撮影

第IX章 本村遺跡の調査

第1節 調査の環境

1. 調査の環境

調査地は県道63号志布志福山線から東にのびる町道275号本村線の東側にあたる。調査地は台地の縁辺部に位置し、周辺西側には比較的平坦な台地が、東側には本村川へと向かう斜面地が広がる。調査地点は遺跡範囲の北辺に位置する。

調査地の現況は、集落内の簡易舗装と未舗装道であったため大きく削平を受ける。周囲も宅地造成などにより削平が激しい。

2. 調査の経過

以下、調査日誌より略述する。

平成13年11月15日(木) 資材などを搬入する。

16日(金) 駐車場・休憩所設置予定地の借地を整地し、調査の事前準備を行なう。

19日(月) 調査に着手する。1区を開削して確認調査で発見されていた花弁形住居(SH1)を検出面まで下げる。

20日(火) 1区、SH1を検出、写真撮影後に遺構内を掘り下げる。断面ベルトを残して、完掘する。

21日(水) 1区の北隣を開削する。2区と呼称する。SH1の北半分を検出する。3区、掘り下げるが、攪乱が激しい。

22日(木) 1区、SH1の床面の調査を完了する。SH1周辺(おもに南側)を掘り下げる。縄文時代の遺物が多く出土する。このことから掘り下げた層が、アカホヤの2次堆積層だと判断する。3区、II層(クロボク層)・III層(アカホヤ2次堆積層)出土遺物をグリッドにて取り上げる。事前に出土状況を撮影する。

26日(月) 4・5区を開削して調査を行なう。

27日(火) 6・7区を開削する。表土除去後に表上直下のアカホヤ層(IV層)中で遺構検出を試みるが検出されず。補足調査トレンチのVI・VII層中よりわずかに石片が出土する。

28日(水) 8・9区を開削して調査を行なう。

29日(木) 10・11区を開削して調査を行なう。

30日(金) 12区を開削して調査を行なう。1区南側の排出土の仮置場を復旧するため、復旧作業により下(III)層を傷つける恐れのある範囲を人力で掘り下げる。層中より遺物が出土する。

12月1日(土) 借地の復旧作業を行なう。

3日(月) 借地の復旧作業を行なう。

第2節 調査の概要

1. 調査の方法

調査地が集落道であるため、調査は特殊な形をとった。まず、調査時間を9時から16時30分として交通量の多い時間を避けた。調査中は交通止め・片側通行とし、調査時間外は毎日通行可能な状態まで復旧した。そのため発掘調査は限られた時間での作業となり、調査方法・記録手段も簡略な手段をとった。調査対象は工事による破壊深度までとし、それ以外は部分的に補足調査を実施した。

調査区の配置は任意で、範囲は1日の作業量に合わせて設定した。調査区は11区を数えた。なお、水道管が存在したため調査区は避けて設定した。

掘り下げは、表土（Ⅰ）層・アカホヤ（Ⅳ・Ⅴ）層を重機にて行ない、その他を人力で実施した。遺物の記録・取り上げは任意のグリッドを用いて行なった。遺構の検出はⅢ・Ⅳ層上面でそれぞれ行ない、補足調査としてⅧ層上面においても確認した。補足調査は3・5・7・8区において約1.5m×3mのトレンチで実施した。

2. 層序

a. 削平状況と旧地形

調査地は宅地造成などにより大きく削平を受けて旧地形は失われている。とくに現道は簡易舗装のため削平が激しい。11区から西の5区にかけては表土直下にアカホヤ（Ⅳ）層が見られる。7区も同様である。

柱状図から想像される旧地形は6区周辺が最も高い地点であり、6～1区まで緩斜面、4・11区から東側が急斜面であったと考えられる。1区の堅穴住居は、台地縁辺部の緩斜面に立地していたことになる。また、1～5区は現在の地形でも高いことから、住居跡はやや小高い土地を選択して築かれていることが分かる。

b. 層序

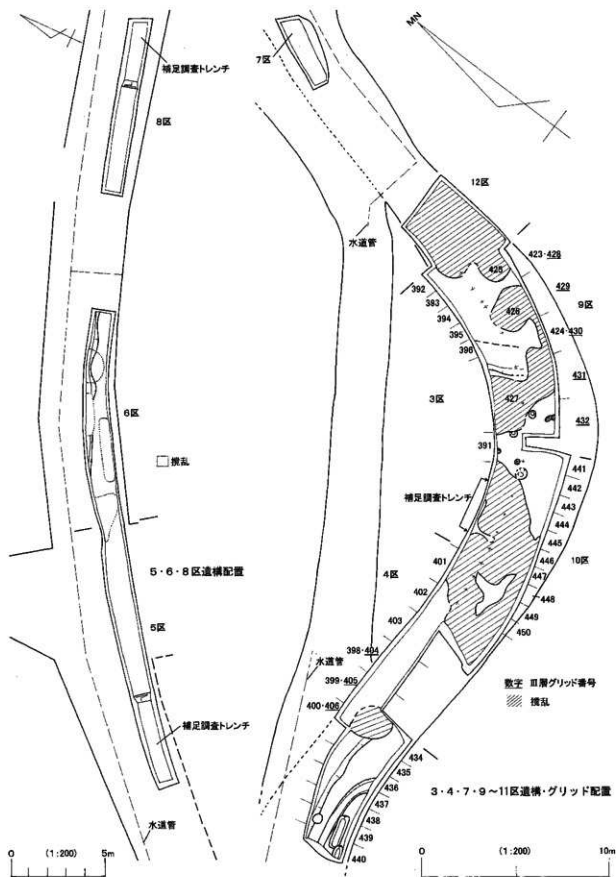
遺物包含層は縄文時代の2層が確認されているが、その上の中世～弥生時代の包含層は消滅している。また、Ⅱ層から遺物が出土しているが斜面地の4～3・9区に集中していることから、本来の包含遺物ではなく流れ込みや攪乱によるものと思われる。また、Ⅲ層が黒色土化するまでの漸移層から出土した可能性もある。いずれにせよおもなⅡ層出土遺物は、本来、Ⅲ層に帰属する可能性が高いと思われる。

以下、各層の特徴・見解などを簡条書きする。

- 第Ⅰ層 第Ⅰ-1層が簡易舗装の整備層、Ⅰ-2層は黒色上で旧耕作土にあたる。
- 第Ⅱ層 黒色土。Ⅲ層以上でⅠ層以下の黒色土をⅡ層としたが、攪乱層やⅢ層の漸移層を一括して捉えてしまったと考えられる。遺物は中世と縄文中期が混在する。
- 第Ⅲ層 黄色土。調査時は「アカホヤ2次堆積層」と呼称した。縄文時代前期・中期の包含層で1区隣接地からは縄文時代早期と思われる土器も数点出土した。
- 第Ⅳ層 黄褐色土。アカホヤ降下火山灰層と推定される。粒度の差から2層に分層が可能である。
- 第Ⅴ層 黄褐色土。アカホヤ降下火山灰層と推定される。Ⅳ層より粒度が粗い。
- 第Ⅵ層 黒色土。縄文時代早期の包含層と思われる。
- 第Ⅶ層 黒色土。
- 第Ⅷ層 黄色土。黄色砂質土ブロックが多量に見られ、摩羅降下火山灰層と推定する。
- 第Ⅸ・Ⅹ層 暗褐色粘質土。いわゆる「チョコ層」であろうか。

基本層位

- 第Ⅰ-1層 コンクリートやバラス、アタゴなどで填圧を受け非常に硬質である
- 第Ⅰ-2層 5GY3/1暗オリーブ灰色土、白色砂粒（1mm大）を含む
- 第Ⅱ層 10YR1.7/1黒色土
- 第Ⅲ層 2.5Y4/6オリーブ褐色土、非常に多量に白・橙色砂粒（1～5mm大）を含む
- 第Ⅳ層 2.5Y4/6オリーブ褐色土、少量の白・橙色砂粒（1～5mm大）を含む
- 第Ⅴ層 10YR4/3にぶい黄褐色土、多量に10YR5/8黄褐色砂粒（0.1～1cm大）を含む



第106図 本村遺跡 遺構1

第Ⅵ層	7.5YR2/1黒色土、多量の白・橙色砂粒（1mm大）を含む
第Ⅶ層	10YR3/1黒褐色土、多量の白・橙色砂粒（1mm大）を含む
第Ⅷ層	2.5Y5/4黄褐色土
第Ⅸ層	10YR4/2灰黄褐色粘質土、非常に多量の2.5Y6/4にぶい黄色土ブロック（5～30cm大）を含む
第Ⅹ層	7.5Y3/3暗褐色粘質土
第Ⅺ層	2.5Y4/4オリーブ褐色土に、少量の5cm大の橙色軽石を含む
第Ⅻ層	5Y6/6オリーブ色土

3. 調査の成果

a. 検出面1（Ⅲ層上面）

遺構はⅠ1区から6区にかけて溝と数基の円形・隅丸長方形の土坑を検出したが、覆土が第Ⅰ-2層と類似することから舗装以前の旧道とその脇の芋穴と考えられる。

1・2区からは竪穴住居を検出した。詳しくは後述する。

4～12区にかけては攪乱の間に6基の柱穴を確認した。遺構の埋土は黒色土でありⅡ層以上の層から掘り込まれたと考えられるが、掘込面や遺構に伴った遺物包含層は削平により消滅する。

出土遺物としては中世の輸入陶磁器610・618がある。

(ア) 竪穴住居

竪穴住居は1・2区において耕土（Ⅰ-1）層を除去後、直下のⅢ層上面において確認した。包含層は残存せず、生活面は完全に削平されている。周囲に覆土・埋土が類似する遺構は検出されなかった。柱穴も確認できなかったことから、生活面は検出面より高いか、竪穴住居周辺には施設などがなかったことが推察される。今回の調査ではいずれであるかは断定できなかった。時期は住居跡の平面形態と土器から弥生時代中期と考えられる。表採を含む出土遺物からは中期初めから末までの時間幅があるため、その間での構築・使用・廃絶が推察される。

形態は、平面形がいわゆる「花卉形」を呈している。規模は中央の竪穴部分が直径約3m、「花卉」部分を含めると直径約5.5mを測る。竪穴部の深さは検出面から35cmになる。花卉状の突出部は短辺1.4m、長辺1.8m、深さが15～20cmを測り、底面は外側が低くなる。

土層

覆土・埋土には黒色土もしくは黒色土と黄褐色土ブロックが混ざったものが堆積していた。遺構内の土は、検出段階の最上層（7・11層）で地山などに比べてしまっており、各層も硬度に違いはあるがしまっていた。とくに8層は層全体が非常に硬くしまっており、面での検出状態は竪穴中央が低い緩やかなレンズ状であった。この硬化層は花卉部では削平により失われて確認できなかったが、存在していた可能性は高いと思われる。これらの層から遺構内の各層は住居廃絶後の単なる覆土ではなく、使用時の版築を繰り返した結果か、排絶後の自然埋没過程での再利用のいずれかと推察される。遺物の出土状況からは後者の方が可能性は高いと思われる。10層は住居構築時もしくは間もない時期の版築と考えられる。

また、竪穴部分の東側壁面で土留材痕を思わせる痕跡が見られたが、住居東側の平面がやや直線を描く部分でしか明確には確認できなかった。

遺物

遺物の土器は、603～606が付近の表探、607～609は住居内部から出土した。607・608は底部などが転がった状態で出土した。607・608は同一個体と思われるが、複数の破片に分かれて分布し、608の底部を境に上半分と下半分が二手に分かれる。層的にはすべて9層に含まれる。

土器の形式は603・604が市来式、605は山ノ口式に比定できる。609は山ノ口式であろうか。

土器は胎土が類似しており、餛物は長石・石英・雲母・黒色砂粒が含まれる。とくに金色の雲母の量が多い。色調は603・604がわずかに赤みを帯びる。

以下、個別に特徴をまとめる。

603・604は外に開いた口縁が斜めにやや下がり、口唇部には凹線が巡る。

605は厚い口縁がやや垂れ下がり、内面に二条の突帯が貼り付けられる。

胴部606は外面に断面三角形の突帯が貼り付けられる。

607・608は同じ個体と思われるが器面の摩滅状態が異なる。608が良好で外面にミガキを確認できるのに対して、607には調整痕はまったく残らない。胴部下半である608には煤など付着が見られる。

底部609は甕の中実脚台であり、外面端部に凹線をめぐらす。器面は外面が工具ナデを縦方向に施し、底面は摩滅して不明、内面の底には指頭圧痕が明瞭に残る。内面に煤けた痕跡が確認できる。

部分遺構

住居跡内の底面より部分遺構が検出された。竪穴部分では土坑1基と柱穴3基が「花卉」部分は土坑1基が確認された。底面中央の柱穴1・2は棟持柱と考えるが柱穴には柱痕が見られず、平面形も楕円に歪む。このことから廃絶時に上屋を解体した可能性が考えられる。

以下、遺構別に述べる。

土坑1 規模は88cm×80cm、深さは18cmを測る。埋土には炭化物が多くみられたが柱穴1付近に偏る。

土坑2 花卉部底面で検出したが、住居に伴うものかは不明である。平面は方形、規模が1辺30cm、深さ35cmを測る。遺構内の土は黒色土である。

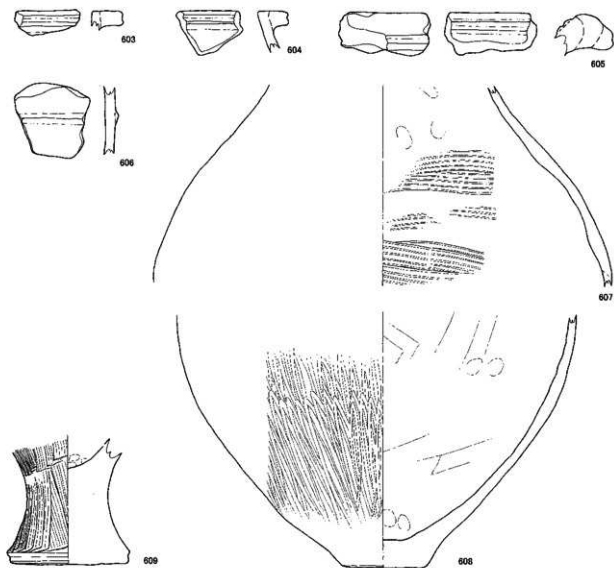
土坑3 住居内の土層断面で確認した。平面形は不明、規模は上面幅が約1m、深さ35cmを測る。底面は住居底面で止めてある。検出面の近くに掘り込み面が存在したと思われる。

柱穴1 規模が20cm×42cm、深さが18cmを測る。柱痕は見られなかった。

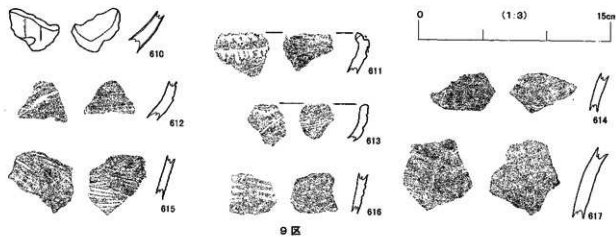
柱穴2 規模は径31cm、深さ23cmを測る。柱痕は見られなかった。

【竪穴住居内土層】

- 1層 2.5YR1.7/1青黒色土、柔い
- 2層 7.5YR1.7/1黒色土、ややしまる
- 3層 7.5YR2/1黒色土、しまる
- 4層 10YR2/1黒色土にアカホヤ（Ⅲ～Ⅴ）層土ブロックが混ざる、しまる
- 5層 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土、硬くしまる
- 6層 7.5Y3/1黒褐色土
- 7層 7.5Y3/2黒褐色土にアカホヤ（Ⅲ～Ⅴ）層土ブロックが混ざる、硬くしまる
- 8層 5Y3/1オリーブ黒色砂質土、非常に硬くしまる
- 9層 2.5Y2/1黒色土、やや多量にアカホヤ（Ⅲ～Ⅴ）層土ブロックが混ざる、硬くしまる
- 10層 5Y3/2黒褐色オリーブ色土とアカホヤ（Ⅲ～Ⅴ）層土ブロックの混合土、硬くしまる



1区 (竪穴住居内ほか)



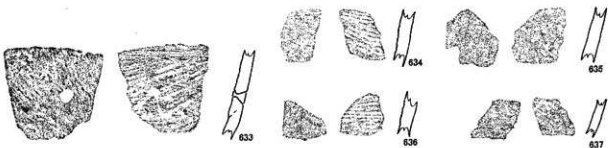
第108図 本村遺跡 土器 1



3 区



4 区



10 区



1 区

第109圖 本村遺跡 土器 2

- 11層 10YR3/1黒褐色土とアカホヤ（Ⅲ～Ⅴ）層土ブロックの混合土、硬くしまる
 12層 7.5YR1.7/1黒色土に少量のアカホヤ（Ⅲ～Ⅴ）層土ブロックが混ざる、炭化物を多量に含む
 13層 10YR3/3暗褐色土に少量のアカホヤ（Ⅲ～Ⅴ）層土ブロックが混ざる

b. 検出面2（Ⅳ層上面）

遺構は検出しなかった。遺物は2区から3・9区にかけては多量の遺物が出た。大きく削平を受ける5～8区にも包含層が存在していたと考えられる。遺構もその立地から存在したことが想像される。

（ア）遺物（Ⅲ層出土）

1区及び隣接地を中心に4区～3・9区の範囲より多量の土器・石器が出土した。出土位置は図表に記載する。各遺物の出土地点は以下に記述する。なお、石器は3節でまとめて述べる。

3区：G391；621、G393；623、G394；624G

4区：G405；628・630

9区：G425；610、G428；617、G430；612・614・615、G432；611・613・616

10区：G441；634、G442；635、G445；636・637、G446；633、G448；631

各調査区の出土土器は、611～613が春口式、621・616が曾畑式、619・620が轟式、その他が深浦式と考えられる。なお、632は702に類似する。

1区隣接地

調査では1区に隣接する畑地を排出土の仮置場として借地した。耕作土保護のための作業を行っていたところ、耕作土直下のⅢ層に多量の遺物が包含されるのを確認した。そこで借地の復旧作業などにより破壊される可能性のある深度まで人力にて掘り下げ、任意のグリッドを設定して遺物を取り上げた。

遺構は包含層を完全に掘り下げなかったため検出していない。遺物量から多くの遺構が広がることが推察される。また、一部でⅣ層上面が見えて土坑が確認できたが、破壊を免れるため埋め戻した。

各遺物の出土グリッドは以下に記述する。

G377；731

G378；704

G379；704

G382；717・736・738

G384；673

G385；706・736

G387；670・7

G388；719・728

G389；674・712

G390；668

G406；697・701

G407；684・692・696・716

G409；648・721

G411；705

G413；677・694

G418；695・698・699・702・711

G419；638・693・695・698・699・702・707・711・720・727

G420；698・734・737

G421；669・677・695・699・700・724・726・737

G422；640・677・689・703

G453；657・663・678・680・681・690・691

G454；643・646・659・678・683・691

G455；642・650・654・659・660・665・683・691・692・709・725

G456；642・647・649・655・661・666・687

G457 : 787・642・647・649・655・661・ 672・679・686・692・713・718・722	G460 : 651・652
G458 : 644・666・681・682・690・733	4トレンチ : 626・627
G459 : 641・667・671・675・676・685・ 688・692・710	5トレンチ : 653・656・658・662・708

a. 土器

器面には様々な文様・調整痕などが見られる。土器形式は深浦式、春日式や条痕文土器などがあ
る。

深浦式 642～677・708～710

文様は突帯文・沈線文・貝殻連点文などが見られる。それぞれが特徴から数種類に分けられる。

以下では代表的なものを抽出して特徴を述べる。

【突帯文①：稚拙な刻目突帯文】

突帯は稚拙な作りで、部分的には一旦途切れる部位もある。キザミはヘラ状工具で突帯全体に施さ
れる。刻目の幅は狭い。

642は口縁がほぼ直立して口縁部下位で若干しまる形態を呈する。外面には厚い炭化物の付着が見
られ、内面にも煤が付着する。外面には前述の刻目突帯文が幾何学的に貼り付けられる。器面には貝
殻条痕が残り、口縁部付近のみ粗いナデで調整されている。口唇部は平坦な面を取るが稜線は明瞭
ではない。内面は口縁部からややくびれる部位までは横方向に貝殻条痕が施され、それ以下には横
方向のケズリが見られる。

同様の調整・文様が見られるものは647・664・651・690がある。色調・胎土も類似しており、色調
はやや赤みを帯びて5YR5/6明赤褐色である。胎土には0.5mm大の石英・長石・雲母・黒色砂粒が含ま
れる。

【突帯文②：精緻な刻目突帯文】

断面三角形の突帯の面に二条の並行した刺突の様なキザミを施す。突帯は明瞭で存在感がある。

口縁部645は口縁部外面の屈曲部に突帯を貼り付け、口縁部は直立する。口唇部には内外面との
境に突帯を貼り付け、上方より二条の刺突の様なキザミを施す。内面にも鈍角な突帯を貼り付けてあ
り、上の面のみ幅広く浅いキザミを施している。器面は内面が丁寧なナデ、外面には条痕が残る。
内面は煤けて外面には厚い炭化物が付着する。

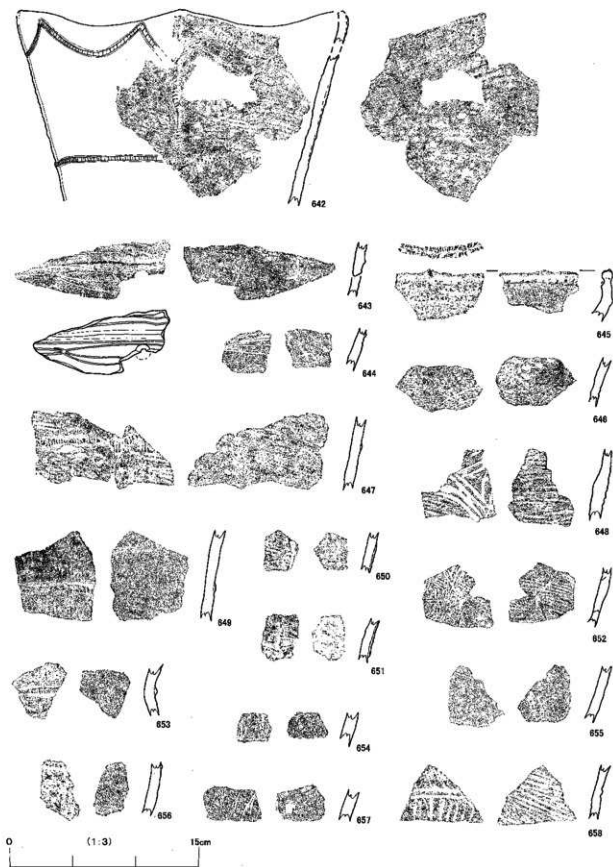
653・656が類似する。653は内側に向けて明瞭に屈曲している。色調は10YR7/3にぶい黄橙色であ
る。胎土は①とあまり変わらないが、混和材の粒度が粗く1mm大を測る。

【突帯文③：その他】

643は刻目をもたない突帯が横位に貼り付けられる。突帯の上下には並行する沈線が文様を描いて
いる。内外面はナデで整えられ、外面には厚い炭化物が付着する。色調は2.5Y6/3にぶい黄色である。
胎土は②と変わらない。

644は643に類似するが、突帯に浅いキザミが施される。内面はケズリで整えられる。

649は削り出した突帯が断面台形を呈して幅のある刻目が施される。外面は縦方向の貝殻条痕、内
面は横方向のケズリの後、同じ方向にナデを施している。外面のみ厚い炭化物が付着する。色調は
7.5YR6/4にぶい橙色である。胎土は鉱物の種類などは②と変わらないが、石英・長石が多く見られ
る。



第110圖 本村遺跡 土器 3

〔沈線文〕

土器は5cm未満の細片であり描かれた文様は不明であるが、ここでは施文具の特徴ごとに述べる。
646・652・651・655・657・720は幅1.5mmで比較的浅い沈線が施される。643の沈線と類似する。
648は四条の並行する沈線が施される。原体は貝殻と思われる。
658は2.5mmの幅広く浅い沈線が施される。横位の二条の沈線を挟んで、上下に縦の沈線を施す。
721は沈線の幅が1.5mmほどであるが深さは2mmと深い。原体はヘラ状工具が考えられる。

〔貝殻連点文〕

662・659・674・708には貝殻連点文が施される。施文される以外に共通点は少なく、連点文は明瞭であったり(662)、ナデにより不明瞭であったり(659)と異なる。文様幅も662は5cmを超えるが659は2cmである。674にいたっては器面全体に見られる。内面調整は659・662が貝殻条痕、674がケズリ後にナデ、708にはミガキが施される。色調・胎土は708が643、659が突帯文①、662・674は突帯文②にそれぞれ類似している。

〔その他〕

678～692は横方向に貝殻条痕を施したものである。その中で690～692は尖底の底部をもち、内外面に横方向の貝殻条痕を施す。外面は貝殻条痕を施した後にナデで整えている。煤・炭化物の付着は内外面に見られる。色調は690・691が2.5Y7/3浅黄色、692が10YR7/3にぶい黄橙色である。胎土は粒度が0.5mm以下である。

690・691に類似するものに678・683があり678の外面には沈線により文様が描かれている。沈線は前述のヘラ状工具で施文されたものに類似する。

管細式 711～727

外面に沈線を用いて文様を描く。文様には羽状文・縦列横線文などが見られる。施文原体は複数見られる。色調・胎土に大きな違いはないが、718・723の色調は赤みを帯びる。ただし、711だけは焼成が堅緻で青灰色に変色する。二次焼成によるものであろうか。

11線は4点あり714・717は同一個体と考えられる。714・717は内外面に複数の沈線を横位に施し、口唇部には浅いキザミを施文する。

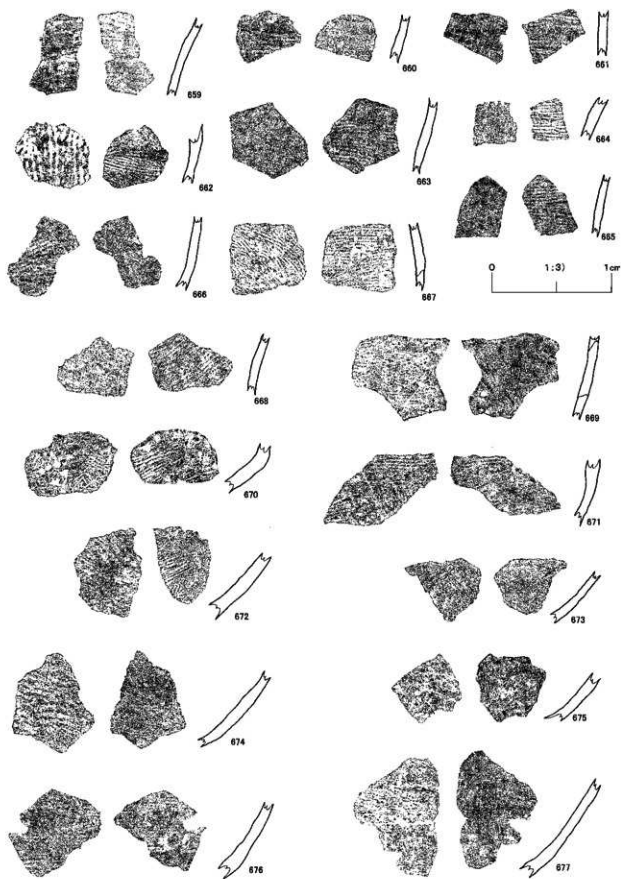
712は外面に縦位に短い沈線を施し、口唇部にキザミを施文する。内面には貝殻によるものと思われる沈線が見られる。

713は外面に沈線で縦列横線文も描くが、内面には沈線は見られない。口唇部には深いキザミを施している。

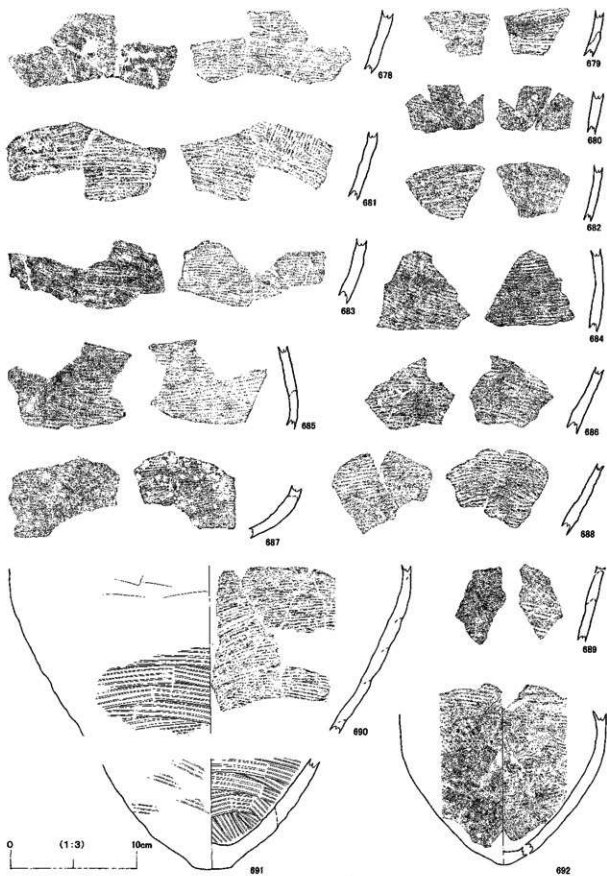
春日式 729・730・732

器形はくびれをもたずに口縁が外開きに延びて口縁端部でわずかに立ち上がる。口縁端部の外面には三条の沈線が横位に並行しており、各沈線の下には径3mmの円形刺突文が施される。口唇部の外面には一部に粘土帯がジグザグに貼り付けられる。粘土帯には径3mmの円形刺突文が見られる。この粘土帯下では沈線と刺突も同様に山形に並行する。胎土・色調にとくに相違は見られないが混和材がやや多い。煤・炭化物は外面に見られて、とくに残存部下端付近は炭化物が横に並んで付着する。

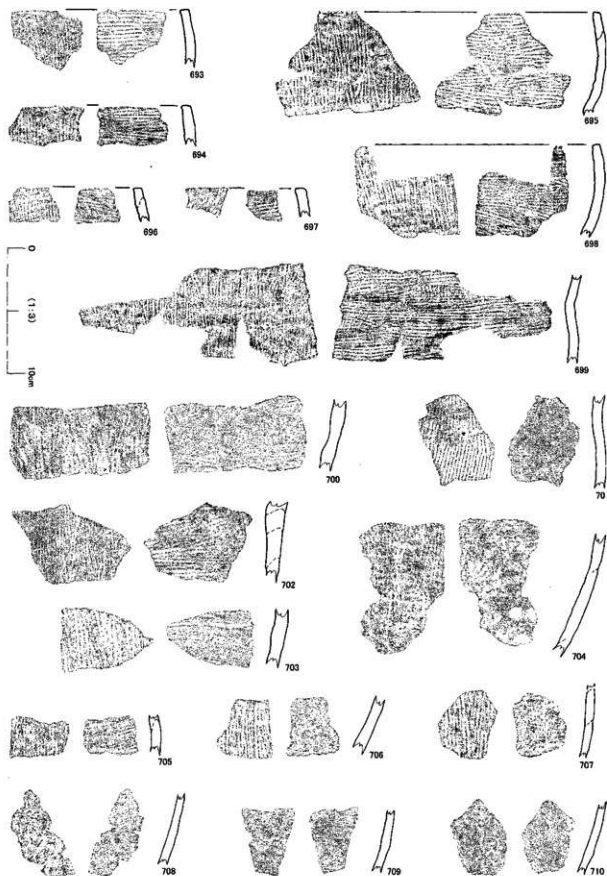
その他 638～641・728・731・733・734・736～738



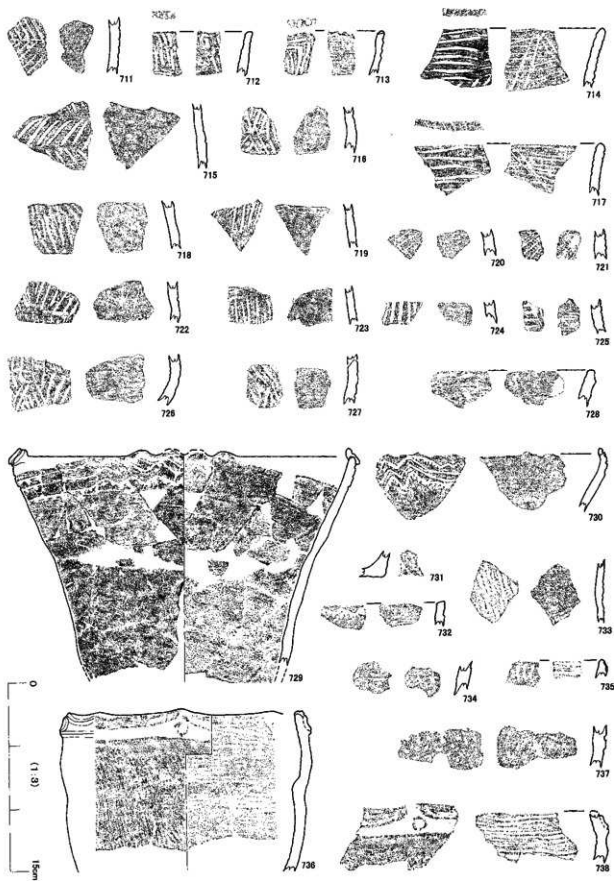
第111圖 本村遺跡 土器 4



第112圖 本村遺跡 土器 5



第113圖 本村遺跡 土器6



第114圖 本村遺跡 土器 7

前述に形式に比定されないものを番号順に記述する。

638～641は縄文時代早期の土器片と思われるがⅢ層中から出土したため断定できない。638は口縁端部の外面に二条の突帯が見られる。平槽式と思われる。641は沈線で文様が描かれている。手向山式であろうか。

693～707は外面に縦方向の貝殻条痕文、内面に横方向の貝殻条痕文を施してある。色調・胎土は類似しており、色調が褐色系、胎土には長石・石英・雲母・赤褐色砂粒が含まれるが、とくに長石が多く見られる。器形は659・699から復元でき、内湾する口縁が真っ直ぐ立ち上がり頸部でくびれる形を呈すると考えられる。いわゆる「キャリパー形」である。口唇部は平坦な面が丁寧な作られる。器壁はおもに0.8cm程度だが702は1.3cmを測り厚い。時期は器形から中期のものと考えられる。

728は口縁部で、内面が丁寧なナデで仕上げられて外面には粗い条痕を施す。

731・733は船元式と考えられ、外面に縄文が施されている。

734・737は外面に径3mmの円形刺突文が施される。曾畑式の口縁部の可能性も考えられる。

736・738の器形は、内湾する口縁が真っ直ぐ立ち上がり頸部でくびれる形、いわゆる「キャリパー形」を呈する。口縁端部には二条の三角形の突帯がめぐり、その間に円形浮文が貼り付けられる。突帯は横に真っ直ぐ貼り付けられるが浮文上では山形に曲がる。口唇部はやや鋭く丸みを帯びて内湾する。器面は貝殻条痕で整えられるが、内面は横に、外面は縦に施される。時期は器形から中期のものと考えられる。胎土には長石・石英・雲母・黒色砂粒・赤褐色砂粒が含まれる。とくに赤褐色砂粒は粒度が～3mm大で多量に含まれている。

b. 石器 740～774

石器は石鏃8点、楔形石器2点、彫器1点、石錘2点、石匙1点、磨製石斧1点、剥片11点、石核2点、礫器2点、磨石17点になる。一部にⅡ層出土のものもあるが、前述したとおりⅡ層出土遺物はⅢ層に属す可能性があり、以下にまとめて報告する。なお、775～786は写真のみの掲載である。

以下、おもな特徴を述べる。法量などの詳細は表のとおりである。なお、グリッド取り上げ分については遺物番号がグリッド番号に対応する。

石鏃は740～747の8点あるが完形は740の1点のみである。745の裏面は原礫面と思われる。石材は頁岩が740・742、黒曜石が741・744・746・747、チャートが743・745である。とくに黒曜石は特徴から三つに分けられて①透明度が低いもの：741、②色調がやや緑がかる5BG3/1暗青灰色のもの：744・747、③不純物を含み透明度の高いもの：746になる。チャートは色調が異なり743が10BG6/1青灰色、745は白色である。

748は楔形石器と考えられ、主剥離の残る剥片を利用したものである。上辺は折れており直接の打痕は見られない。楔形石器754は器面に研磨面が残存しており磨製石斧であったことが分かる。破損した磨製石斧の基部を利用・加工して楔形石器に転用したと考えられる。上辺・左辺に打痕があり下辺・右辺には数枚の剥離が見られる。石材はやや風化した頁岩である。

749は彫器としたが、上下の辺に細かく不規則な剥離が見られることから楔形石器の可能性もある。上辺は折れて直接の打痕は見られない。

石鏃750は横割き剥片を丁寧な整形する。基部まで整えていることと形状から石鏃の可能性も考えられるが、刃部の先端にやや磨滅が見られて刃部が歪むことから石錘とした。石鏃751は三角形の剥片の側面を整えて刃部を造りだす。刃部先端には磨滅が顕著に見られる。

石匙752は接合資料で1区隣接地内のみならず隣れた地点で出土した。刃部先端に破損と思われる剥離があるが最終的には二つに割れたため廃棄したと考えられる。

磨製石斧753は基部であるが、研磨面は剝離によりわずかに残るのみである。破損した磨製石斧に二次加工を加えている。材質はやや風化した頁岩である。

剥片は755～765の11点あり、石材は頁岩が761・762・765、不純物を含んだ透明度の高い黒曜石が755～760・764である。756・764には原礫面が残る。762～765には再度剥ぎ取った痕跡が見られる。763の石材は色調がやや緑がかる5BG3/1暗青灰色の黒曜石で、楔形石器の可能性が考えられる。

石核766・767は不純物を含んだ透明度の高い黒曜石である。

磨石は17点あるが断面が楕円形を呈すもの、もしくはそれに近いものが多い。また、11区出土の770～773は四点が並んで出土した。771・773は丁寧に器面全体を磨き、772は破損するが上下の尖頭部分に敲打痕が多く見られる。770には割れ面に赤く変色する範囲が見られる。他は均整の取れた楕円ではないが、手ずれしたかのような器面をもち、敲打痕はほとんど見られない。

774は磨耗面を2面もち石皿の可能性も考えられる。同様に平坦な面をもつものは779・780があり、779は典型的な磨石を小型にしたものにも思われる。側面に1ヶ所の敲打痕の集中部が見られる。780は全体的に赤みを帯び、平坦面は赤みが強い。

775～778は2～4cm大の小礫の表面を磨いている。

c. 検出面3（Ⅷ層上面）

7区周辺は、確認調査において縄文時代早期の包含層が確認されていたが、工事により破壊を免れることから調査対象から除き、7区での補足調査に留めた。遺物・遺構はともに確認されなかった。また、数地点で行なった補足調査でも遺構・遺物を確認できなかった。

(イ) 遺物

石器 739

確認調査2ATトレンチのⅧ層より石鏃739が出土した。739は先端部に磨減が見られ使用痕と考えられる。片方の脚部が欠損する。

第3節 まとめ

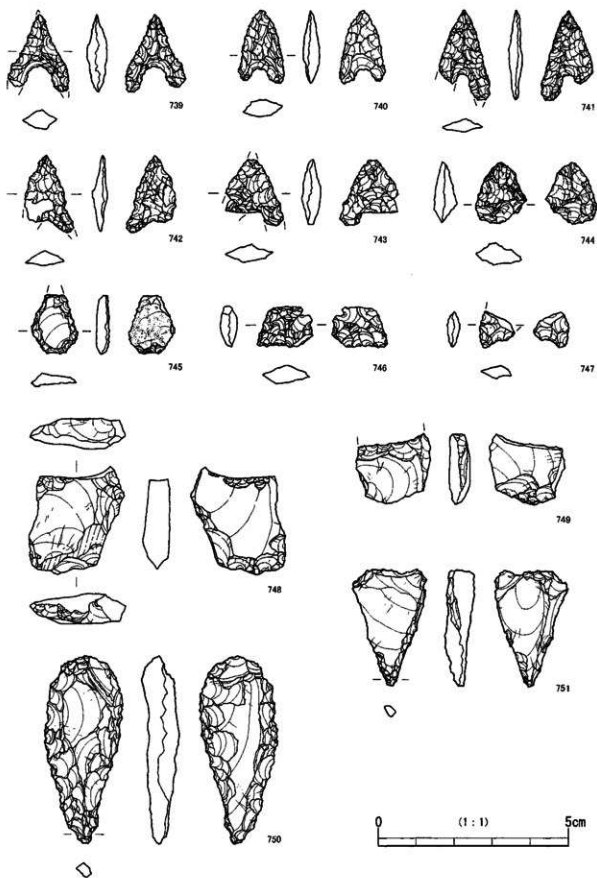
以下、調査成果を簡単にまとめる。

- ① 弥生時代中期の住居跡が検出され、調査地点は集落内に位置することが判明した。また、住居跡の存在が予想された。周辺で最も高い範囲は、削平により包含層及び遺構の掘り込まれた地山までが消滅している。しかし、周辺の緩斜面には住居跡が広がると考えられる。
- ② 検出された「花卉形住居」は弥生時代の南九州独特の形態といわれており、今回発見されたことで、その分布域を考える上で貴重な資料となる。
- ③ 1区隣接地より出土した遺物は確実な共伴資料ではないが、限られた範囲内の同一土層から複数の形式の土器が出土しており、本町における縄文時代前期・中期の遺物のあり方について重要な資料となる。

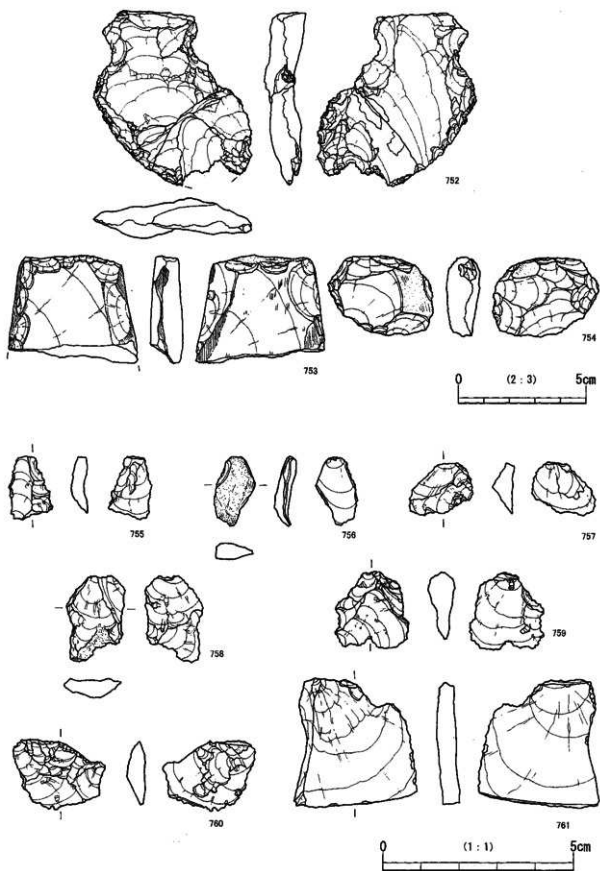
¹ この形状の堅穴住居跡には「花卉形住居」と「日向型削平住居」などの呼称が存在するが、ここでは形状を重視して花卉形とする。

採掘 番号	遺物番号	出土位置		種類	器 種	石 材	法 量(cm, g)			
		地点	層位				最大長	最大幅	最大厚	重量
740	456-457	1区	Ⅲ	剥片石器	石鏃	頁岩	1.90	1.15	0.40	0.70
741	441	10区	Ⅲ	剥片石器	石鏃	黒曜石	2.40	1.35	0.35	0.67
742	455-3	1区	Ⅲ	剥片石器	石鏃	頁岩	2.00	1.30	0.40	0.55
743	394	3区東半	Ⅲ	剥片石器	石鏃	チャート	1.75	1.50	0.50	0.90
744	455	1区	Ⅲ	剥片石器	石鏃	黒曜石	1.60	1.40	0.60	0.81
745	394	3区東半	Ⅲ	剥片石器	石鏃	チャート	1.50	1.20	0.35	0.64
746	387	1区	Ⅱ	剥片石器	石鏃	黒曜石	1.05	1.50	0.45	0.60
747	394	3区東半	Ⅲ	剥片石器	石鏃	黒曜石	0.90	0.90	0.30	0.20
748	407	1区	Ⅲ	剥片石器	楔形石器	チャート	2.80	2.50	0.80	5.80
749	455	1区	Ⅲ	剥片石器	彫器	頁岩	1.90	1.95	0.55	2.40
750	430	9区	Ⅱ	剥片石器	石鏃	頁岩	4.90	2.10	0.70	8.70
751	394	3区東半	Ⅲ	剥片石器	石鏃	頁岩	3.05	1.90	0.70	3.40
752	408	1区	Ⅲ	剥片石器	石砧	チャート	8.20	8.30	1.10	37.80
753	422	1区	Ⅲ	礫石器	磨製石斧	頁岩	4.00	5.00	1.25	37.40
754	355	3区東半	Ⅱ	剥片石器	楔形石器	頁岩	3.10	4.00	1.30	20.30
755	365	3区東半	Ⅱ	剥片石器	剥片	黒曜石	1.70	1.05	0.40	0.70
756	447	10区	Ⅲ	剥片石器	剥片	黒曜石	1.80	1.00	0.40	0.80
757	394	3区東半	Ⅲ	剥片石器	剥片	黒曜石	1.30	1.60	0.55	0.90
758	373	3区東半	Ⅱ	剥片石器	剥片	黒曜石	2.20	1.55	0.40	1.50
759	407	1区	Ⅲ	剥片石器	剥片	黒曜石	2.00	1.90	0.70	1.80
760	366	3区東半	Ⅱ	剥片石器	剥片	黒曜石	1.80	2.30	0.50	2.00
761	421-1	1区	Ⅲ	剥片石器	剥片	頁岩	3.40	3.20	0.50	8.30
762	421-2	1区	Ⅲ	剥片石器	剥片(R.F)	頁岩	5.40	6.70	1.30	38.40
763	328	2区	Ⅱ	剥片石器	剥片(R.F)	黒曜石	1.50	2.10	0.60	2.40
764	23(確認)	5 T	IV a	剥片石器	剥片(R.F)	黒曜石	1.90	2.20	0.90	4.30
765	345	3区東半	Ⅱ	剥片石器	剥片(R.F)	頁岩	1.90	1.95	0.90	4.80
766	397	3区東半	Ⅲ	剥片石器	石核	黒曜石	1.90	2.70	2.00	13.00
767	3(確認)	4 T	Ⅱ	剥片石器	石核	黒曜石	4.50	4.60	4.40	94.90
768	398	4区	Ⅱ	礫石器	礫器	砂岩	9.54	12.80	5.25	758.00
769	333	3区	Ⅱ	礫石器	礫器	砂岩	7.50	3.20	2.32	30.30
770	437-4	11区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	砂岩	7.58	2.60	4.96	98.00
771	437-1	11区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	砂岩	6.50	5.17	3.13	149.60
772	437-3	11区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	砂岩	6.90	5.25	3.60	163.80
773	437-2	11区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	砂岩	7.00	5.22	3.42	180.10
774	427	9区	Ⅱ-Ⅲ	礫石器	磨石(平)	砂岩	14.50	10.80	3.30	926.00
775	328	1区	S H 1	礫石器	磨石(平)	砂岩	5.55	4.98	3.65	112.42
776	364	3区東半	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	2.91	2.74	1.78	15.50
777	329	1区	S H 1	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	2.67	2.00	1.87	7.57
778	436	11区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	3.83	3.43	2.74	32.94
779	455	1区	Ⅲ	礫石器	磨石(平)	砂岩	5.54	5.27	2.65	73.32
780	422	1区	Ⅲ	礫石器	磨石(平)	砂岩	7.47	5.75	2.44	128.04
781	460	1区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	砂岩	6.83	5.50	3.83	132.53
782	322	1区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	2.53	2.38	2.06	10.02
783	384-387	1区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	7.24	4.68	3.68	114.46
784	457	1区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	6.52	5.13	4.84	125.79
785	408	1区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	砂岩	6.68	4.90	3.91	111.79
786	344	3区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	8.13	6.08	4.59	155.01
739	383(確認)	2 AT	VII	剥片石器	石鏃	頁岩	2.00	1.60	0.50	0.83

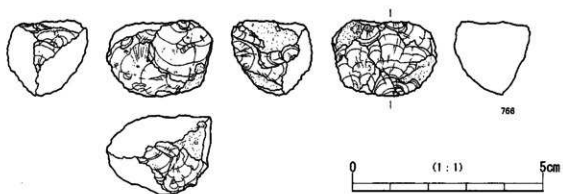
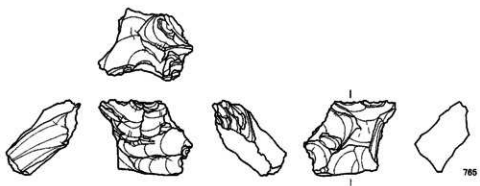
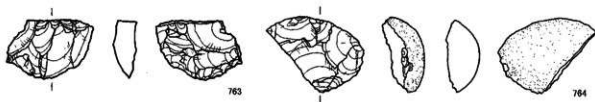
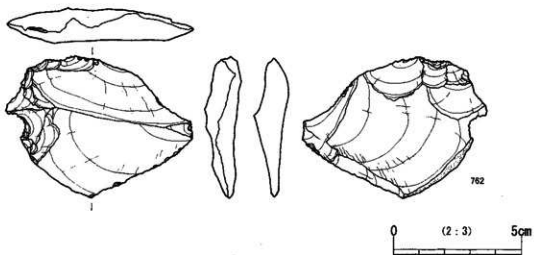
第10表 本村遺跡 石器観察表



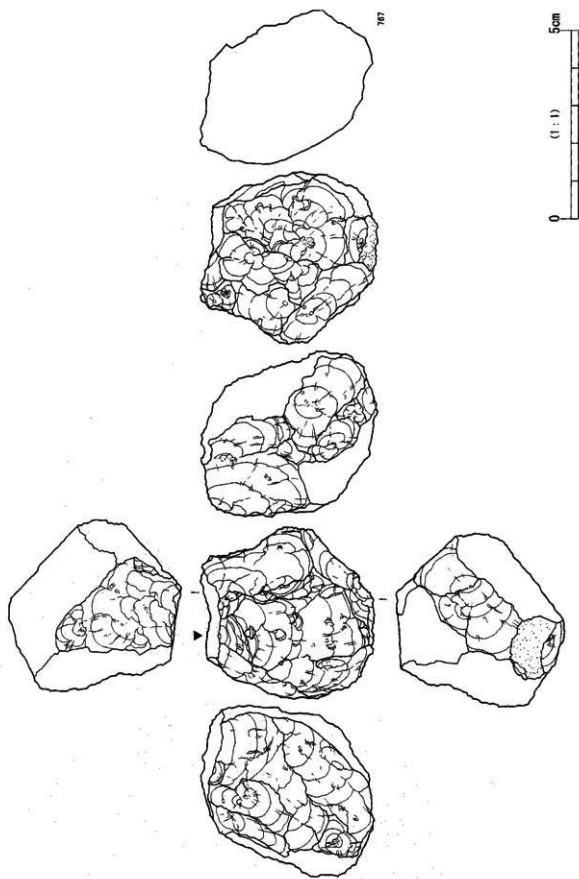
第115圖 本村遺跡 石器 1



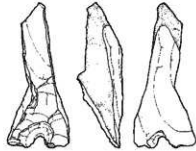
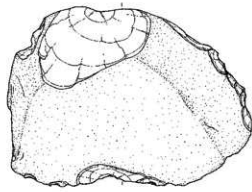
第116図 本村遺跡 石器2



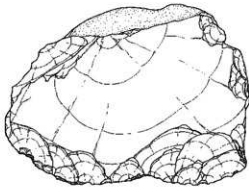
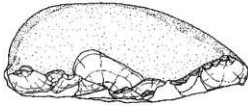
第117圖 本村遺跡 石器 3



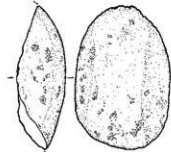
第118圖 本村遺跡 石器4



769



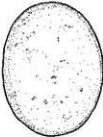
768



770

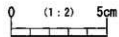
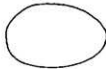
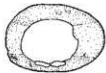


772

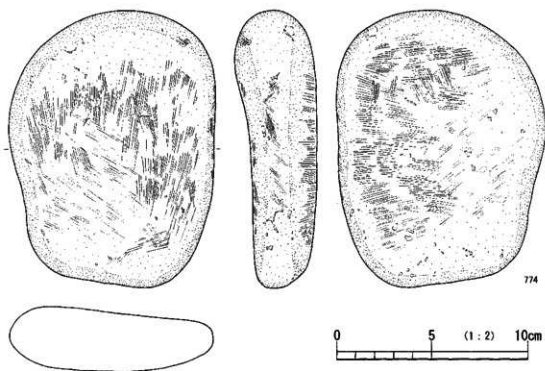


771

773



第119図 本村遺跡 石器 5



第120圖 本村遺跡 石器6



609



608

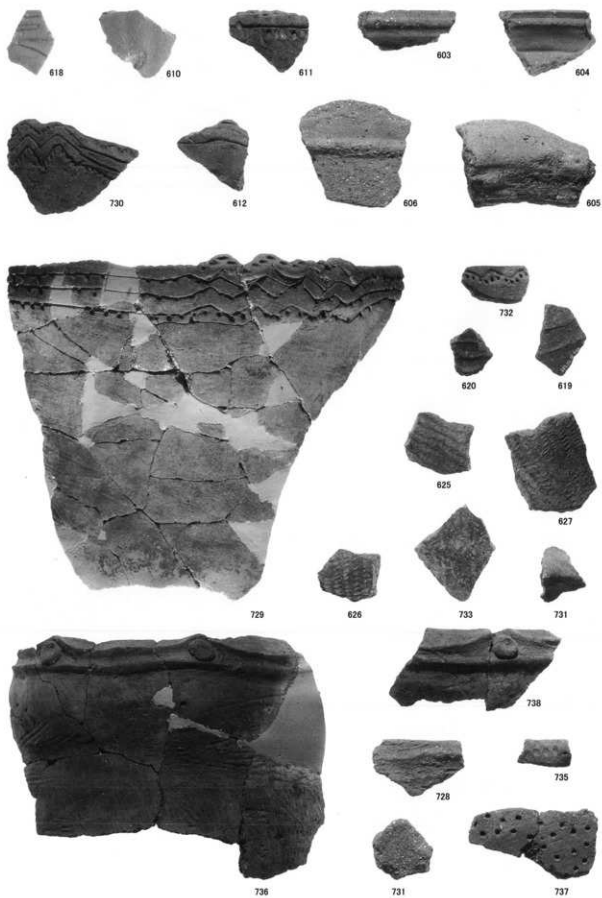


691

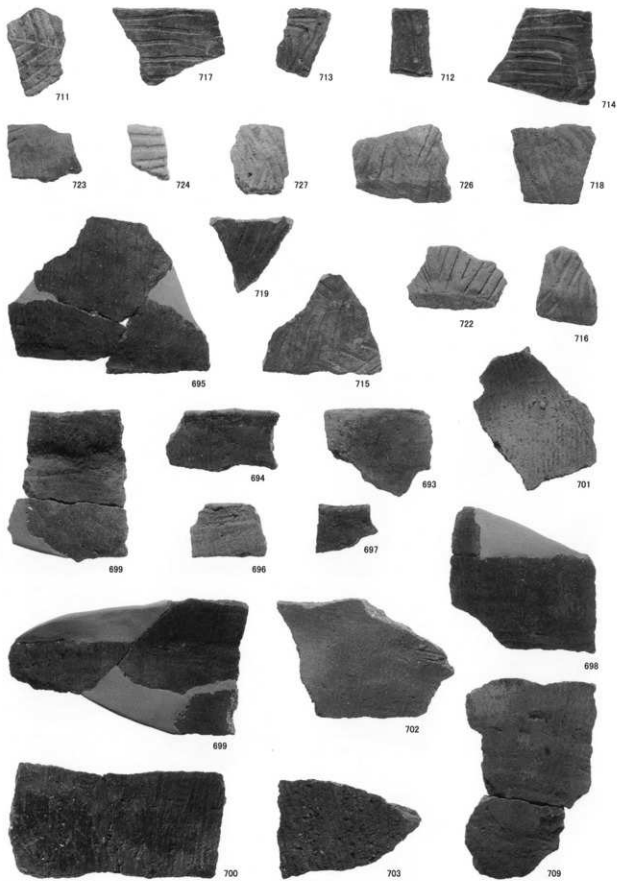


787

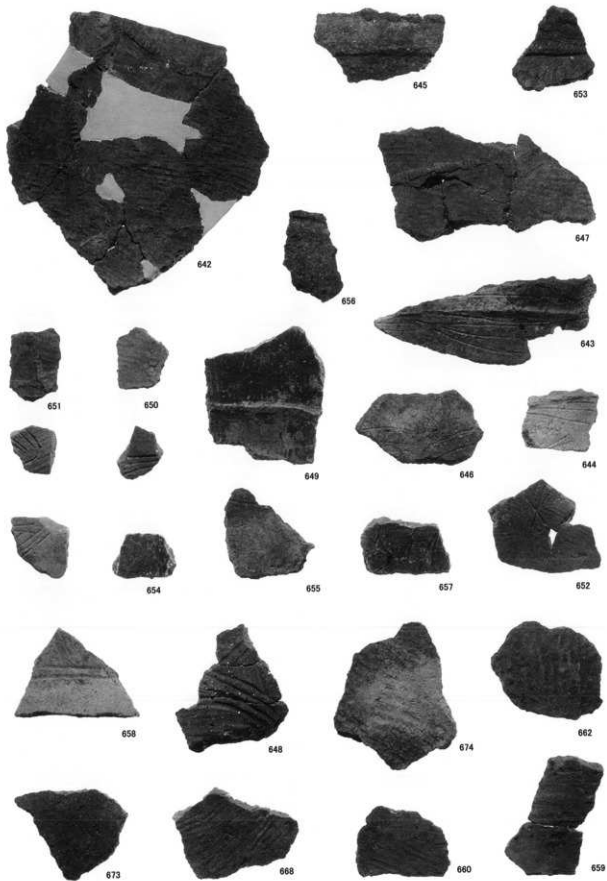
図版69 本村遺跡 遺物 1



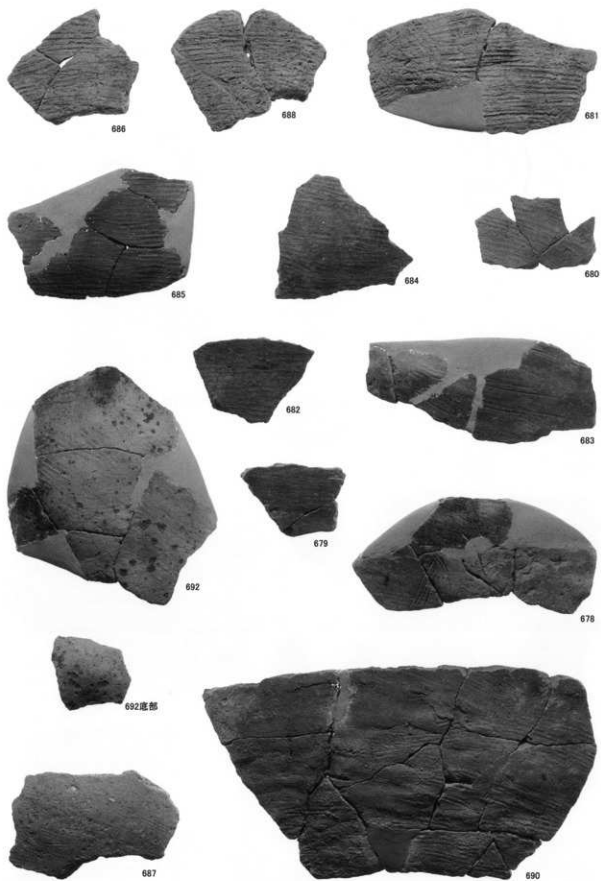
図版70 本村遺跡 遺物2



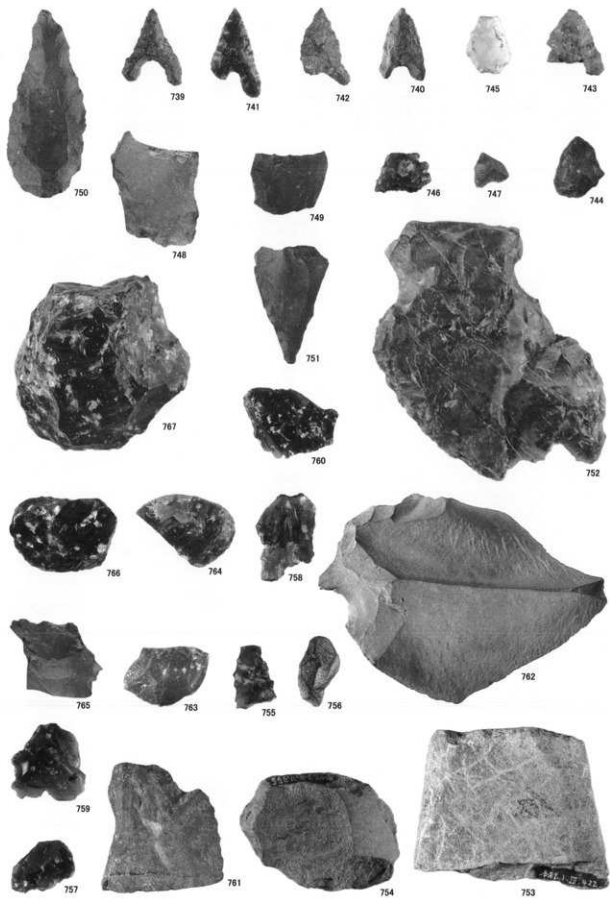
図版71 本村遺跡 遺物3



図版72 本村遺跡 遺物 4



図版73 本村遺跡 遺物5



図版74 本村遺跡 遺物6



図版75 本村遺跡 遺物7



竪穴住居 検出状況 1



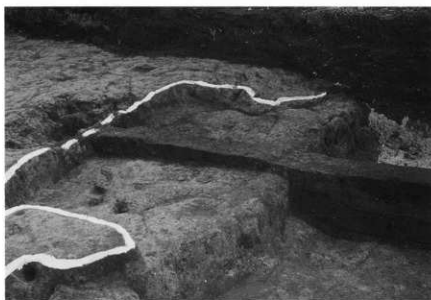
竪穴住居 検出状況 2



住居内遺物出土状況



竪穴住居 完掘状況



竪穴住居 土層断面 1



竪穴住居 土層断面 2



5区 表土除去後
(東より)



8区 補足トレンチ断面



9区 表土除去後
(西より)



Ⅲ層 遺物出土状況 1
(No702)



Ⅲ層 遺物出土状況 2
(No610)



Ⅲ層 遺物出土状況 3



図版80 本村遺跡 遠景

※南より撮影

有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

**黒葛遺跡(第1次・第2次)、牧原遺跡、
牧原A遺跡、大迫遺跡、飯野A遺跡、本村遺跡**

発行日 2003年3月31日

発行 鹿児島県曾於郡有明町教育委員会
〒899-7492 鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地
TEL 0994-74-1111

印刷所 斯文堂株式会社
〒892-0838 鹿児島市新屋敷町14-16
TEL 099-226-3747